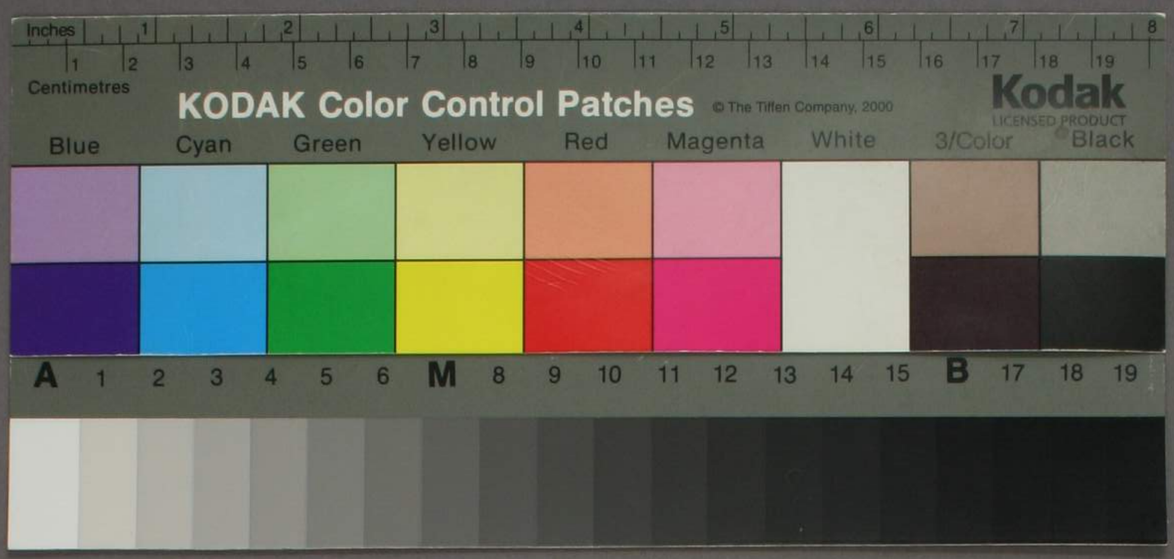
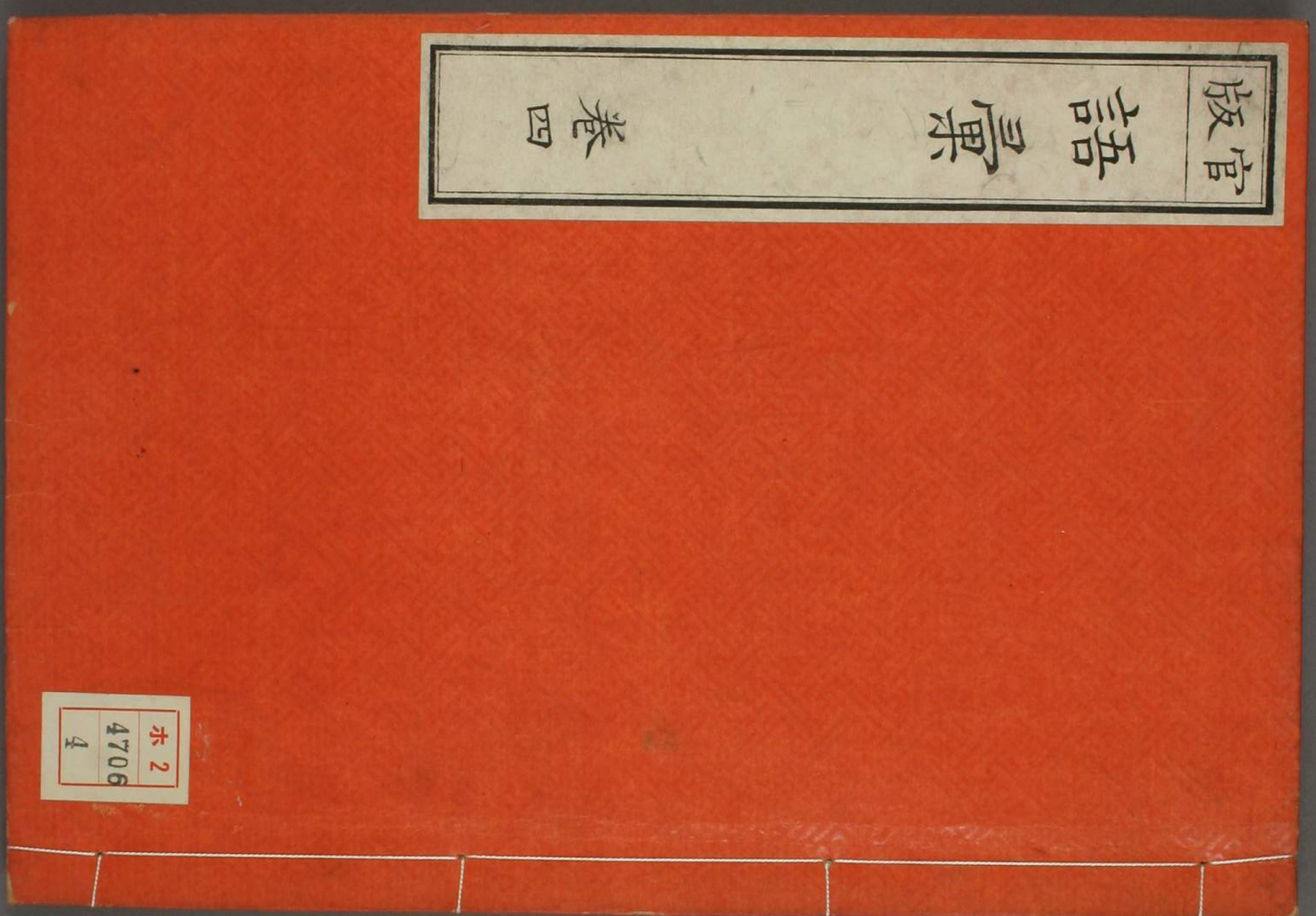

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black


官版
五語彙
巻四

ホ2
4706
4

ホ2門 4706 巻 4

あま

あめの轉ふて一つの體言となりたるもあり
注あめの下ふあり　記上　高天原　訓高下天云阿麻

あま。あまおとこ

女の僧あり　崇峻紀　大臣謂使人曰
率此尼等　釋紀十四　尼　私記曰阿麻語也

あま。あまびと○あまのこと○りんぞをう

漁する人をいふ　記下　歌曰、意布袁
余之斯毘都久阿麻余　和泉郎　和名阿萬
竈の上の煙のかゝる處をいふ　體源抄六　あまといふ物ふさ〳〵上てありけるをそれとそ

（けれどもらさゝる不損也）

あま

樂曲の名　和　沙陁調曲、案摩李直轉

あま　俗

婦女を罵りて呼ぶ語あり

あまあふひ

草名のぜうの下ふ注せ

和　莊胡　和名乃世里云阿末安加奈

あまい 俗
物の味をひふいふおまえの音便あり

あまい 俗
細工物のうへ又ハ人のあらくるどふいふ注おまえの下ふあり

あまいも 西京加茂 俗
草名、山慈姑の下ふ注もそ

あまうけをあ
仰ぎたる鼻ゆて雨うけの義あり

あまうおや 筑前 俗
以字 鼻仰アマケテ○ 玉篇 鼻仰鼻也
虫名、おおのおやらの下ふ注もそ

あまうそ。ろろうそ
うそどりの雌あり
其色赤くもそ

あまうへ
尼を敬ひていふ語あり 源若紫 尼うへもてもそれさうへ御げへ元のつまへさふ

あまえのたれ クルシキ
榮見をそね曲 かへそおそへもそもさ おまえのたへくおかされけむ
アマエタルコノゾヨイ をいへふあり 蜻中 今いおまえいたへくそもうりかへくむ事もかへくるべへ

あまえたまる 俗
親へそふ過ぎて
キマラスル をいふ

あまおさえ 俗
掘塀あどの上ふつくる木あり
又かき木ともいふ

あまおふひ 俗
雨をあのぐたあふ器物ふかくる布絹又ハ油をぬりくるものあり

あまがえる
果類、すめぐれの下ふ注もそ

あまがけ 俗
天を飛行まるをいふあり 万五 久へくこのあまのうそそらも安麻賀氣利ともにたまひいふかひふへ見たまふへむ 祝詞式神書詞 天翔國翔ふ字 後撰 あまうけりへる

あまがさ 俗
雨ふると元用ゐる笠あり
齊宮式 雨笠盛油絁袋二

あまがさ
かへくうさの下ふ注もそ

あまかも
酒糟の甜くへて食用ゐもぐれともの
本和 甜糟和名阿末加須

あまかぜ
雨氣を催もそ風あり 源藤裏葉 心あわもそびき

あまかせ 陸奥南部 俗
おまうぜふまおもりぐふきおひうへり給ぬ果名、けんぽへの下ふ注もそ

あまがつ
いひうごくこと 源薄雲 めのとご
あまがつやうの物とりそのる 河海
木偶の類凶事を祝ふまもるためあり
○天兒榮 あまがつやうの人ぞうの
あまがつを 俗
紙又は絹ふたあるくるめる人ぞうり御そ
雨中着用の衣服なり

あまがは
うはそうなる車さしよせをりことごとく高くるたげうまびて東 将軍家
任大将参鶴岡宮給雨皮張延各一人海人藻芥
雨を防ぐ具あり 齋院式 絹云々雨皮裏
料各一丈七尺 靖下 やぐてそこもこふあま
木ぞうの果實の
内膜をいふ

あまがひ 俗
仆名、こゆのつめぐひふ似て、大きさ
四分ぞうり、白質ふ黒斑あり

あまがひ 和泉堺 俗
石決明の下ふ
注ぎ

あまがへる。たんがくびた。○あまびた
○このそがへる○まぞうりのあうぞう○あをびた
蛙の一種、形小く、色鮮緑或は灰色、指三尖、先ふ小き黒珠あり、樹上ふ棲で
雨ふらんとする時は必ず鳴く○樹蛤 和 蛙黽 和名阿末加閉流 靖中 山ごもりの後は

あまがわ
そうれうふ異
あうらぶ

あまがわ 俗
珊瑚の上品あるものあり
亞瑪港の音あり

あまがわ。○あまうさ
○かんざう
春宿根より生ず、高さ二三尺、其葉互生、
形藤葉ふ似て莖葉毛茸あり、花豆花ふ
似て淡紫色茨を結ぶ、根黄色すして、味至て甘し、藥用ふ供ず、
本和 甘草 和岐阿 和 甘草一名蜜草 和名

あまがわ
砂糖、飴、あうらの甘きものあり
靈異中 甜 阿万

あまがわ
塩の淡きものを云ふなり 人九集 あづき
あふぐるとの水のうはまびめたくも

あまがわ
あうらあまがわ
あうけり

上の甘きふあるの〳〵語轉じて水物あるの
ぬうねふ云ひ、物事の堅固あうぞ〳〵して

綾くゝとせなるこゝろ〳〵人俗ゟ親の子ゟおもふ〳〵といふも是ようく出たるまうり 東北院職人歌合我こひのまゝ〳〵がこゝろのうゑおもふこと思ひきれ〳〵もきれぬれざりけり 将門記 加ヶ甘詞調兵類

あまのたきまうり 俗

雨中着用の服まうり

和 雨衣 萬岐沼

あまのたことは

尼を敬〳〵そいふ 源 若紫 けうそくのうへゟ經をおこなひそうとうやまつげゟ讀ゟる

あまのたくひ

草名、さゝらきのの下ゟ注ゟ

あまのたぐひ人とゝ〳〵んもと

人の心ゟ入ぐたやうにあるうゑたゝ詞まうり おもふらんのおもゟおもふ〳〵 将門記 所以集

あまぎらぬ

雲霧の空を曇らもと云ふまうり 万 八 天霧之雪もふ〳〵ぬ 又十 天霧ぢふりくる雪の空のくもりまうり上の條見合もべ〳〵

あまぎらふ ハヒフヘホ

天霧合あらもとをいふ

さゝふつゝふもそぢもりつゝ 又七 天霧相ひくるふ〳〵〳〵〳〵

こゝろぐらゝのそらのこゝろゟ涙ぢ立くもる

あまぎりまうり

小雨の如き霧をいふ 万十三 思ひ出ることたらもべ〳〵おもさゝゟ山ゟうゑ雨霧のけぬべ〳〵おもゟ

あまぎりふ

矢の羽の名 羽形圖 上々品あまぎりふ

又あまぎりふとゝ

あまぎる ラリルレロ

空の曇るをいふおゟぎて〳〵もゟおもふ 古今 冬 梅の花それ〳〵ともえこそ久うくの

あまぎれ〳〵ぶ 新古 春下 山高を峯の

おゟぎる上ゟ同ど〳〵 拾遺愚草下 吹そぐる雲のくもゟを行月のおゟぎる風ゟひうりそく〳〵

同上 續後 春中 さゝ〳〵そゝうゝふ山の高根ようおゟぎる雲ゟ匂ふ春風

同上 新勅 春上 梅ぢ香もおゟぎる月ゟかぐんつゝそれ〳〵ともえこそ霞むこゝろ〳〵の

同上 新勅 冬 さゝなの原やそ〳〵まろ〳〵ふる雪のおゟぎる浪ゟかぐふ釣舟

同上 風雅 春 吹ゝたる春のおく〳〵のゝとゝ〳〵ひおゟぎる花ゟうゝもむ山本

同上風雅華 そらゆふあやぎる星そ
うえ〳〵むる曉やそのむら〳〵雲の空立

同上古今冬 梅の花それともそこえなき久
かたのあやぎる雪のなべてふるまでに

あまのぐ俗
雨を避る具をいふ
こぎけの下ホ注ヒ

あまらこん らこん音
まこん大きけようあまらこんまろる
草名、つるあまもや
下ホ注ヒ

あまらき俗
草名あまの沉ホ同ド 異本大同類聚方 藏
阿末支一名安万久差 味大ホ甘久微香

あまらさこ
草名、あまらそうびの
下ホ注ヒ

あまらさうる播磨俗
草名、らそうびの
下ホ注ヒ

あまらさど俗
あ〳〵砥の上品あるものなり
肥前島原及び天草の産

あまらだも サシスセ
天ようらだりてあるを
祝詞式大祓 天降依志奉支

あまらだり
天ようり降りくる人とのふ義あり 祝五のごと
あり〳〵あまらだり人あまらんとそおぐのを
天ようらだるを
いふなり

あまらだりてある
天ようらだりてあるを
いふなり

あまらだる
甘口の義ゆて人の意ふうあるべくはか〳〵
いふなりて アマクチデハカヌ るごとの類あり

あまらち
小鼠あり、形常の鼠よりやゝ異あるゆゑ、
大なるものも二寸餘ホ過ざるを上中ホ穴

居〳〵、時々出て人ホ害をとるのそうの
小鼠也、食ヲ入及鳥獸、雖至盡不痛、今謂之甘口鼠

あまらくさる俗
和 鼷鼠 和名阿末久知須美
緩く堅固あるべくをいふ
そうるる人を容易くそうることてあり

あまらぐも
天の雲あり 万七 天雲ふちらくひろうて
あるあるものそれぐ〳〵こと〳〵ゆゑあるも

あまぐも
さびさらん五月
雨のそら

あまらむ
あまぐもの（枕詞）
又十九天雲之ゆたたひくりなん 古今戀五
雲のうねるごとく 万三天雲の
〇天雲ハ大空ホたゆたひ又ハ彼方ホ行通ふものゆゑ〳〵とも又ゆたたひくりなん
奥處の意ゆて天雲の深くかすみ
又天雲ハもろ〳〵ホ見さるゝゆ
うねるごともつゞけくり又形
故ホやゝゞて天雲の雷とりくるゝ
あまぐり
ぐりのつゝひまゞぶ
まゆりくるゝ

あまおほとのゐ 御湯殿記 文祿四年十五日
のごとのようあまらもゞ〳〵ゆる
万十二天雲之のたゆたふところ 又十三天雲之
ゆら〳〵ホ 又十三天雲のおく〳〵かもあ〳〵も
万十五 あまぐものごとものようそわも人の後撰雜三天
雲のうくゞちの上ホ 又九天雲のごとく〳〵ゆけゞ
あまぐもの 万十八忽見雨雲之氣 新六二
日數へて行つゝもりぬるあまぐものうへり

あまぐも
雨ふる雲ありり 万十八忽見雨雲之氣 新六二
日數へて行つゝもりぬるあまぐものうへり

あまらつゞめ（俗）
あまけ
人々のさりくホ 夫五 こちふけゞ雨ぞふる
うた雲のうきまつめてもものぞうらゝき
源藤裏葉 いとゞうち添りて雨もよけありと
あまごひ（俗）
あまのご（俗）
あまごせ ごぜ音
あまことうた
〇天の字ハ假借あり字義ホ
拘もるべらふを

鳥名あまのりの
下ホ注ゝを

雨のふらんとするけしきを云ふなり
源藤裏葉 いとゞうち添りて雨もよけありと
あまのご（俗）
嘉魚の類、長さ七八寸香魚ホ似て
黒赤の小斑あり〇似嘉魚
らひびろの下ホ
注ゝを

尼を敬て呼名 徒然草上 尼御前
何事ぞとかくの給ふ
餘語歌の義ゆて、歌の結句ホ、又語を添へ
わたるをのふなり 記下 此三歌者天語歌也

あまごひ
參りてあまごひ〳〵侍りけ
以字 雩コヒ一名五龍祭
雨のふらん事を神ホ乞ひ願ふなり
天武紀 雩之 新古神祇 社司どもまごふ給ホ
あまごひ

あまごひどり（俗）
鳥名こづこひどりの
下ル注ニモ

あまごひのつかひ
禁秘抄下 先以藏人令拂神泉苑
有驗時藏人參東事由 月詣集
ゐて雨ふらしてと大内ぶ
よりけまで

あまごひびと（俗）
虫名あまごひの
下ル注ニモ

あまごひのまつり
雨のふらん事を神ゐ請ふ祭あり
臨時祭弐 祈雨神祭八十五座

あまごころも
雨をいとひてこもりさらるあり 万八 雨隠
ろろいぶせこのでられがかもそぶの山ハ色
づたふけり 又古 安寐其毛理
コヒゴロモ里ホキゴロモ
とよろもとゐるなり

あまごもり（枕詞）
天人の衣といふ意あり佛書盤石劫より
出たり 六帖三 あまごろもきるものづるちとせの

あまごろも
雨をあまごろもきるものづるちとせの
ろろいぶせこのでられがかもそぶの山ハ色
づたふけり 又古 安寐其毛理
コヒゴロモ里ホキゴロモ
とよろもとゐるなり

あまごろも
雨のきる衣あり 源手習 あま衣うるまろる身
ゆやあろし世のかろの袖をうけてあのもん

あまごろも
漁撈もるもの衣あり 六帖三 まちのろろふ
玉藻ろりあまごろも神をろしりの

ひるこそろや
ろろこ

あまごろも

あまごろも（枕詞）

あまざかる 万四 天佐我留ひろの國べゐ

雲近奈免謎通以和多邏素西渡以嗣箇播
箇施輔智 万四 天佐我留ひろの國べゐ

あまさかる（枕詞）

望めば天とつゞきたるおき遠ざかりてとゞきたるやうより避り離れたるを遠きをいふ又神功紀に天疎向津媛と詔ふみ

空の常に向ひたるやうをいふ是は天に放りたるもの故に冠らせたり荒木田久老の説に天離向津

天に放りたる日の御ことをいふ意ありて此の一言ありて發語ありと云へり

嫉と宣ふ詔命の奥に離れたるをいふ

あまさかる

あまざけ

魚名、ところ〴〵の下に注せり

あまざけうぐひ（俗）

あまさく○あまりさく○あまおさく

あまさる若狭（俗）

あまさる

あまざる

あまざるひ

あまざるし（俗）

あまざるり

あまざれ。こゝをあまざれとも

寄肉也 字鏡集 膿アマ

あまざれく（俗）

あまざれり○あまがれ

あまざをのうを

淡醐（和）留阿萬之利

淡醐一名阿萬之魚 和泉國網人家漁具

二十石六斗 和泉國網人家漁具

雨水のあれたるやうをいふ

雨具を着るをあまごゆるといへり

雨水のあれたるやうをいふ

雨水のあまりたまりて流れ出ざるやうをいふ

雨具を着るをあまごゆるといへり

雨水のあまりたまりて流れ出ざるやうをいふ

内膳式 味塩魚

あまざをのうを

神代紀下 阿磨佐箇屢避奈菟謎迦 万二天離夷者あれど（）都うさとりひろの國をとゞこほりなく天放るをもあまけるといふ

空の常に向ひたるやうをいふ是は天に放りたるもの故に冠らせたり荒木田久老の説に天疎向津媛と詔ふみ又神功紀に天離向津

天に放りたる日の御ことをいふ意ありて此の一言ありて發語ありと云へり天離向津

嫉と宣ふ詔命の奥に離れたるをいふ

あまさる

あまざけ

魚名、ところ〴〵の下に注せり

あまざけうぐひ（俗）

あまさく○あまりさく○あまおさく

あまさる若狭（俗）

あまさる

あまざる

あまざるひ

あまざるし（俗）

あまざるり

あまざれ。こゝをあまざれとも

寄肉也 字鏡集 膿アマ

あまざれく（俗）

あまざれり○あまがれ

あまざをのうを

淡醐（和）留阿萬之利

淡醐一名阿萬之魚 和泉國網人家漁具

二十石六斗 和泉國網人家漁具

雨水のあれたるやうをいふ

雨具を着るをあまごゆるといへり

雨水のあまりたまりて流れ出ざるやうをいふ

雨具を着るをあまごゆるといへり

雨水のあまりたまりて流れ出ざるやうをいふ

内膳式 味塩魚

あまざをのうを

かゝりてこそおのれおもさへうたてあれかゝりてこそおのれおもさへうたてあれと思ふやうをいふ

跡かくるの一世の人をいふ

飢死けるをいふ

あまざらし

あまざらし（俗）

あまざらり

あまざれ。こゝを

あまざれく（俗）

あまざれり○あまがれ

あまざをのうを

雨水のあまりたまりて流れ出ざるやうをいふ

雨具を着るをあまごゆるといへり

雨水のあまりたまりて流れ出ざるやうをいふ

あまあめり
あまあめや 俗
あまあめやうじ 俗
あまあめやうろ 俗
あまあめよ サ|シ|スセ
あまうさる ラ|リ|ル|レ|レ
記下 美妙呂尓、都久良尓、阿麻久毛利、多麻加俟、都岐阿麻斯、頼政集 天の原朝行月のひさしくもあまうさるかな世かな
あまうさぜ せ音
暑しと尼前と申けり
あまそだ
女の佛道に入て髪をそぎたるをいふ 源 薄雲 この春よりおもひ御らむあまそだ

雨中の物の潤ふをいふ 散木上 雨そそぐ袂も来ぬし旅衣もろともにぬるとまもるまでに
虫名、あまのあやうし
下の注also
障子の油を塗て雨を防ぎうつ明を取るための具あり
さゝらの實甘きものをいふ
○甘石榴
自ら物を餘すをいふ
他の物をアマサレルをいふ

次のおのそゝるをいふ 八雲御抄 あまそだ
そだ峯の高きをいふ
あまそそる
雨だれのおつるをいふ 梁塵愚案抄 あまそそるとは
たちぬれぬその户ひらくせ
あまた。たくさん
あまた。たんと
受迹多儀比等用能未 源 桐壺 女御更衣あまた
さぶらひたまひける中に類名 數多
山の峯おほの空中の高く秀ることを云ふ
万十七 安麻曽々里たゝなづく
數の多きをいふ 元恭紀 佐瑳羅皷多迹之抒能臂毛弘等抒舍氣帝阿麻哆絆泥
あまたたび
幾度もの意also 何べんも
あまたたらう
おもふこと/\ありよげあるうちにたゞあるきぬあやるをとゝろぐ/\ 源 総角 御文のくつもあり、たゞ/\ 装束の類一具あるをひとゝろぐ/\と入れ 源 東 女のさうぞくなどもあるおもあれどひて
給ふ

あまたらす

あまたる俗

あまだち

又 ねもころにこひのむたぶみもだえ阿麻治志ゝ

あまちや俗

八日灌佛ニ用ゐる

あまちや俗

あまちやづる俗

あまついそさう

まつる地ヲ垣ゐどゝして境をゝ
神代紀下 吾則起樹天津神籬及天津磐境

物の十分ニ満ち足るをいふあり
万二 大きなるものゝちらばるゝ天足有
ロルアマキ を
いふあり
天をいふなるべし 万五 ひさうごの阿麻遲ハ上略
なるべし ものへふるくそありをゝ まさゝ
めでたきものゝむあざむくぞ

上常山の萱葉を煎じ飲るものゝまさ
甘草を茶ニ雜へ煎じ飲るものを云四月

木名、きまあまちやの
下ニ注ス

草名、つるあまちやの
下ニ注ス

あまつ天ゆて天のものゝ貴ぶ故ニやうて
これを美称とするなるべしそこゝ神を

度々のことゝて スド 又イクドモイクドモ
何ベンモ何ベンモ ふり 古今 旅 夜を寒こもゝく
女のいゝこゝろありけんあまたゝびうちぬる貫之集人ニ文遣しけり。
多くの所ゝて 數ヶ所 ふり 源 紅葉賀 あまた
所もあり紅給ふぞ
多くの年ゝて 數年来 ふり 源 葵 あまたし
けふあふたのしいつごろもきそへつゝ
川風も 狹四 あまたゝび 俗 たひ ○ふづを
○ふ だひ○ふをも過ゐけまゞ
色淡青を帶ぶ、味甘く
美あり
全形のようだひニ似て、目の上高く
起り、頭形そのをれだひニ似ふり其鱗

あまだぶり
此三歌者天田
振也

阿麻陀牟振の義ゐて歌の初言をとりて
云へり 記下 其太子被捕歌曰阿麻陀牟云々

あまたむ 枕詞

記下 阿麻陀牟加流乃袁登賣

○あまゝとぶやの下ニ注ス

あまつかぜ

あまつかぐだ

人の出入る後つ物と居る置座とのふものか作りてり
祝詞式大殿祭天津金木本打切末打断千座置座置足波志

あまつかさ

神波天磐門乎押波氏天之八重雲乎伊頭乃千別千別氏所聞食武
天上小座に神ありて記上今吾所生之子不良猶宜白天神之御所に祝詞式大祓天津

あまつくらのよごと

凡践祚之日中臣奏天神之壽詞
為萬壽之寶詞也

あまつきつね

走天狗也其吠聲
似雷耳

あまつきり。あまつさぎり

空ふれる霧なり 万七やそがてるべき
月を白妙の雲かくせる天津霧なり

あまつち

日の神のおはします所をいふ 神代紀上
請姉照臨天國自可平安

あまつくも

天の雲居ゆく空をいふ 續千載二空ゆもや人の
知らんとおもふ天つ雲井を詠ぐりせば

あまつしお

石決明の甘く醃たるものをいふ 内膳式
志摩國御厨云云味漬腸漬云云夏鰒等

あまつつ

あまつつ
そそぐ
もろつけり

あまつま

溢懐歟踏祝詞式大殿祭皇御孫之命乎天津高御座に坐せ天津
捧持賜天詔壽宜志々 万十 あめつちと別るる時ゆ久しくの天験ときさめ
てふ天の河原ゆあふぎ見るきのふの
月をかさ祈て

あまつまそで

あまつ貴ぶ詞はさぞその當の称なり古へ
祓の時此を持て身體を拂ひ〳〵なり

天風の義 古今 雑上 あまつかぜ雲のかよひ路吹とぢよをとめのすがたしばしとどめん

あまつかぶだ

あまつ貴ぶ詞、うるはしき小木の枝を細く切たる物ゆて、古へ祓の時此木をもつて諸

あまつかさ

天上小座に神ありて記上今吾所生之子不良猶宜白天神之御所に祝詞式大祓天津

あまつくらのよごと

凡践祚之日中臣奏天神之壽詞
為萬壽之寶詞也 義解 謂以神代之古事

あまつきつね

走天狗也其吠聲
似雷耳

昔出たるもの 舒明紀大星従東流西便有音似雷云云僧旻僧曰非流星

あまつきり。あまつさぎり

空ふれる霧なり 万七やそがてるべき
月を白妙の雲かくせる天津霧なり

あまつち

日の神のおはします所をいふ 神代紀上
請姉照臨天國自可平安

あまつくも

天の雲居ゆく空をいふ 續千載二空ゆもや人の
知らんとおもふ天つ雲井を詠ぐりせば

あまつしお

石決明の甘く醃たるものをいふ 内膳式
志摩國御厨云云味漬腸漬云云夏鰒等

あまつつ

あまつつ
そそぐ
もろつけり

あまつま

溢懐歟踏祝詞式大殿祭皇御孫之命乎天津高御座に坐せ天津
捧持賜天詔壽宜志々 万十 あめつちと別るる時ゆ久しくの天験ときさめ
てふ天の河原ゆあふぎ見るきのふの
月をかさ祈て

あまつまそで

あまつ貴ぶ詞はさぞその當の称なり古へ
祓の時此を持て身體を拂ひ〳〵なり

あまつそら

あまつそら

あまつそらのそをあゆろそらゆできそこえあは

あまつそら ○うはのそら

あまつそこゞ心天津空ありうちかゝめとそ

あまづたふ ハヒフヘ

あまづたふ 枕詞

あまつつゞ

天つ空ゆそ天をいふ挾二九重の雲のうへまでのありるがおもろ空をやかてことにいふん

朝廷をいふ但し天上ゟ比したるなり

古今雑体 人ゆろこそういれ〳〵けま身ハ下

虚空の漠たるをふたこゝ心のおちゐ居ざるたとえも

空を傳ふをいふなり 万三天傳飛雪ごもの

又士たまかやもむこのうたりゟ天傳日の

万七天傳日笠の浦ゟ又二天傳入日さゝぬれ

○天路を傳ひゆく日とつゞけたるなり

天上ゆそ素盞嗚尊の爲たまへる罪の類を天つ罪といふいゝ助辭なり 祝詞式大祓

畔放溝埋、樋放、頻蒔、串刺、生剥、逆剥、屎戸、

詐々、太々ノ罪ヲ天津罪止法別記

あまづつゞ

雨をいとひて出ぬをいふ 万四久々の雨もふゝぬゟ雨ゐ見きこゝふたゝひてこゝみ日

あまつのりのふとのりごと おほつのりこゝふ尊びそいふ詞ふことありそこと

とゐ此祝詞を称へ重ねてかゝりふるり

そは天津神の貴き勅言あれかゝり言のこゝろゐ宣説詞あり 祝詞式大祓

天津祝詞ノ太祝詞事ヲ宣ヘ 台記東洛元年大嘗會別記中臣壽詞

日照万里天都詔戸ノ太詔ノ言遠

此玉櫛遠刺立八百多比登朝

以下告祀

あまつはめ 俗

形狀胡蝶より大ゆゝて、両翼尾より長ゝ、

全身黒色、足短小ゆゝて腹の毛ゐかゝる、

天陰るとき空中ゆ群飛して

蟲を捉る故ゐ名づゝ

あまつばめ 俗

あまつび

鳥名、おほとりの

下ゐ注ヒ

雨粒ゆて雨露ゟとの一粒々々ゐるを

いふ 類名滴又涕アマヒ

あまつひつぎ

嗣々ゆまろ〳〵めと申の御称あり 記上天神御子之天津日継所知之 祝詞式大祭 皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座尓座天津日嗣乎 万千秋乃長秋尓大八洲豊葦原瑞穂之國乎平氣久所知食止言寄奉賜比氐 紀竟宴歌 あ〳〵うひのうこのきさ〳〵 遠〳〵を阿麻都比津機のそへば 天皇の皇統を継ぐせ給ふをいふ天照大御神の大御任を受け傳へまして其御業と

あまつひと

あめびと ふ同じ 天人のありて供養〳〵奉るを思ひてもあまつひとをうちそらふ〳〵ん

あまつひもろぎ

磐境當爲吾孫奉齋矣

あまつひれ

雲ゐたゞをそつづめの天津領巾かも あまつをとめの衣の上ゐ着る物ゆて領巾あり 万十 あをねうせの吹たゝよそもろ〳〵 天の星あり 古今秋下 久〳〵の雲のうへにそるきゝゝあまつ星とぞあやまたれける

あまつみそら

西京烏羽俗

あまつみちや

草名、山慈姑の下ゐ注ゝ

天祖彦火瓊々杵尊

あまつみづ

天上より降りまもる天皇の御祖先の義 祝詞式大殿祭 詐々 神武紀 擧此豊葦原瑞穂國而授我

あまつみそら

雨をいふ 万二 大船のおもひたのみそ 天水あまつみづそ待ゐ

あまつみそろ

枕詞 万二 天水あまつみづそもろゐ〇こゝゐ並知皇予尊の天下をあまつ〳〵めさん事を諸人の仰きそまつを皇天の待意をもてつゞけたるあまつ雨を

あまつやごと

天上の大宮ゐて執行ふ事をいふ 祝詞式大殿祭 詐々 太々乃罪出此出波天津宮事以氐

あまつめ

天つをとめの下ゐ注ゝ 續後紀十九 皇之民浦嶋子加天乃釣根乎垂弖

あまつやゝろ

天神を齋る社をいふ〳〵 神武紀 祭天社國社之神 祝詞式祈年祭 天社國社登称辞竟奉坐神

等能前ホ
白々

あまづら ○とろろ ○ゐたどり ○つるそう ○あまざけ
樹ホ着く、葉ハ卵圓ゆゝして鋸歯あり、梢頭ホ小白花攅り開き、傘の形を成す、今も山人ハらの蔓を燃ゝ、其汁を飲む、味醴の如ゝ〇藤繡毬

深山ホ生ずる蔓草ゆゝして、其藤蔓より細根を出ゝ他

あまづら
けづりひのあまづらふりてあまのはらふりさけみれば

和名阿末都良
和名止々岐
本和千歳蘗汁
和千歳蘗良俗用甘葛

あまづら ㊊
のことかゝり

器物の環紐などに用る形ありて楽曲家摯の假面より出てふゝたゝえて醴きる

あまつをとめ ○あまつめ ○あまをとめ

天津をとめと成ゐける雲路たゞぬる人もあれど世ホ夫ハらるゝあれど豊のあかりホふろうるをとめの舞のまうぐるをと

天女をいふ又五節の舞をもたとえていふ

後撰雑二 五節の舞姫ゆゑ云々

あまてらす ㊊ ㊊ ㊊

泥良須神のこと

あまでらす

僧の居る寺ありて

舒明紀 遊

如之命 あめをぢあまつゝめもと

大空ホ照う給ふをいふありて

万五 天照日女之命

あまてる

大空ホ照るをいふありて

万十 天光やひのけゐわゝ

續古序 あゐてるわゝも人の道を

あまてるつき

月かげのようのそくるむしろのへあゝ

家のめらうふたるやをいふ雨を防ぐ意ゝて雨がといふあゝ

万七 ひさかたの天照月をいふ

雲やそこゐうるめうんあゝろをとめの天の羽衣

あまでら

女僧の居る寺ありて

舒明紀 遊

塑于尼寺尼舎

あまてらす

泥良須神のこと

あまてらす

天つ日の天照らゝ給ふをいふ

三實忠 朕我食國乎平ゝ安ゝ天照ゝ治聞食須故波此大臣之方斯利

あまてる

大空ホ照るをいふありて

万十 天光やひのけゐわゝ

續古序 あゐてるわゝも人の道を

あまてるつき

月かげのようのそくるむしろのへあゝ

家のめらうふたるやをいふ雨を防ぐ意ゝて雨がといふあゝ

あまどうふく どうふく 音
與次郎木綿の兩胴腹を秀康卿おきを奉る
草名、あまどころの下ゐ注也

あまどころ 俗
草名、おもてあまどころの
下ゐ注也

あまどころ 俗
草名、ところの
下ゐ注也

あまとぶくも
空をとぶ雲あり 新六二 久々々の天飛ぶ雲の
のごとくにて日のうげを立へだつ〳〵ん

あまとぶとり
登理母都加比曽 記下 阿麻登夫、

あまとぶや 枕詞
万二 天飛也かるのごとくに又十二 天翔也くもの
やう〳〵ろの〇天を飛鳰とゐふ意ゐて輕と
陸奥ゐ古事記ゐ阿麻陀牟加流乃表登賣とゐるも
あるゐ枕詞ゐ又万葉集ゐ天飛也領巾ゐたと
あるも也

あまとり 〇あまとりつもめ 〇おやつもめ 〇あまとりつばめ 〇おやつばめ
〇そもそうけんひつぢ 〇たうつもめ 〇そもそうとうつもめ
〇そうせんつばくろ
〇そもそうぼくろ
雨前ゐへ必ず群飛也
和 胡燕子 阿萬止里

あまのな
あまのな
あまのな
あまのな
あまのな

甘き菜の意ゐて薺岸おどとゐくゐ
祝詞式 大野原 尓生物者甘菜辛菜

草名、そもそもこぐさの下ゐ注也
本和 白微 知名、美奈之古久佐一名、久呂女久佐一名阿末奈

草名、おもてあまどころの下ゐ注也
和 女蔵莊 知名、恵美久佐、一名安麻奈

草名、かくれがさの下ゐ注也
本和 麻黄 知名加都加久佐一名阿末奈

草名、おやあまどころの下ゐ注也
本和 黄精 知名、阿末奈一名、尼未恵美

あまのな 俗 〇そもそうぜんこ 〇そもそうとうぜんこ 〇おやあまどころ
〇かくれがさ 〇ほそこころ
〇うるぼし 〇うるぼしな
抽て莖端、花を開く小さるもの
淡紫條あるもの常あり又淡紅黄花等の異種あり 〇山慈姑
大小二種あり、大なるゐ葉水仙の如く一二
尺小なるゐ二三寸、両葉すて中間莖を

あまな 播磨俗
草名、まれぐさの下ヲ注ヲモ

あまな 越後俗
草名、むぐさ紀ざうし一ものの下ヲ注ヲモ

あまな 近江俗
草名、つりぐ孫ゐんとんの下ヲ注ヲモ

あまなぐさ 俗
草名、あやめの下ヲ注ヲモ

あまのおふ ハヒフヘ
心ゐかゝるひそよ〳〵と思ふ歌より甘和の意
又美諾ヲモノふ美知スル歌より 仁徳紀 不和

遊仙窟 甘心 四季物語 たれゝ〳〵をもあまのおふものや

あまのね
草名、あやめの下ヲ注ヲモ
本和 女菜 和名、遠美久佐、名阿末奈

あまの孫かる ラリルレ
廣くあまねく意歌より

用明紀 漲溢 三寶 孝徳紀 旁流四表 古今序 あまね 弥生おほん うへくしてあまねく
波やゝまのあまねきをあふれ 金葉 雑上 日のひかりあまね空のけしき

○周 又遍
周くてあまねく

あまの孫くせ〳〵むくてゝ
平他字類抄 周 アマヘ

あまの孫ゝゝ サシスセ
酒名歌より 尺素往来 天野、南京之名物、兵庫西宮之旨酒、古節 天野酒 宗五大草紙

あまの ○あまのさけ
酒 歌 あまの

又御撙 飛鳥井雅章卿説 ○按ニあまの又百濟ノ地名ヨリ出タルカ
造りいだせる處ゆゑ天野も河内の地名より出たるかゝ

あまのいそらそぶ孫
撙撞ゆゑ作りたる神代の船歌よりいそら堅固の義 神代紀上 故載之天盤撙樟船而順風放棄
天上ゆゑ皇孫命のまゝ大殿の御座をいふものそら堅固の義歌より 神代紀下 皇孫乃

あまのいそら
離天磐座 天盤座此云二阿麻能以簸矩羅一

あまのいそだて
あまの貴てのふのそら堅固の義 出雲風土記 布都怒志命之天石楯縫置給之故云楯縫

あまのいそと
いそと開ゝ〳〵時よろもの神たちの
公事根源下 天照太神の天のいそとをさして籠り給ひ〳〵もと
あめのいそやらの下ヲ注ヲモ 十六夜日記 天の

あまのいそふる
神代の船あり いそふる堅固の義あり
あまのいそあだ
神武紀亦有乗天盤舩飛降者
あまのうなひ
いそふる堅固の義神代の事あり 神代紀下
伊弉冊尊立於天浮橋之上
背負天盤戴臂著稜威高鞆
神代紀上二柱神立天浮橋而
記上
あまのおもて
神代紀天と地との間に懸る橋あり
あまのかきだ
樂曲の崇摩の假面あり紙もて作り
山形に雉の形を画きそへるなり
あまのがは
崇摩の假面の如き斑ある矢の羽をいふ 太平十三
あまのうはようだ
あまの面の羽付ある平胡籙の箙をあひ
神代の田の名、少許の限の意 神代紀上
神代の田の名、川ようなる
日、神、尊以天垣田爲御田
ところ紀田をいふ
晴れる夜天の川の如くひろがる
ところあるをいふ 和 天河 阿萬乃加八
上に同じ、水の出口鋭くして
水たまりぐる田あり

あまのらひだ
處號曰天擘田、天川依田、
天口鉏田
上に同じ木の根多くありてころ紀
田あり 神代紀上 其素戔嗚尊之田亦有三
あまのこ
えぬうば人の子と 新古雜下 白波のよるる渚ゆ
よもつこをあまの子ふるびやどもさだめぬ
海人の子の義漁人をいふ 万五 あさうなる
阿未能古等母と人いひてそるゆゑ
あまのこ
遊女の下ゆ注せ 六百番歌合 誰とあだうき筏を
忍ぶあまの子もあも〳〵浅き怨こそありけり
あまのさでそ
古へ物を呪ふ時ゆ手を拍てそいふ 記上 即
也伊 あまのさでをとうちて
るむのろひをするある
踏傾其船而天逆手矣於青柴垣打成而隠
あまのさでろ
神代の枠あり 轉りそん人の世の物ともいふ
釋紀十 息長帯日女命、欲平新羅國下座之
あまのさでろ
時云云其上塗天之逆桙
建神舟之艫舳
あまのさでろの下ゆ注せそん
添たる詞記上 天之狭霧

あまのざけ　あまのちから

あまのざこ　俗　○あまのあゆく
天探女の轉訛ゆえ人を恐まどはす我まゝの人の言ふ逆ひそろふまじきものをいふ

あまのさなだ
神代の田の名挽き田あり　神代紀上　以稲種始殖于天狭田及長田

あまのさえづり
海人あまどの言語の訛りてきこえぬをいふ　源　明石
鳥のさえづるごとくあるをいへり

あまのおやこ　○あゆんおやこ。○ゆふざう
○あらそふもの　○ちむ　地上ゐ一分許の小穴を作り掻む長さ一寸許、黄白色、首ゐ赤黒色、蜈蚣の如く背ゐ
○おんなむ
二ゐの蚌ありて駱駝の如く故ゐ
おんなむの名あり　○釣索駝

あまのおやく　俗　あまのざこの
下ゐ注まも

あまのかぜ　草名、まん稿んぐさの
下ゐ注まも

あまのかそぶね
海士の乗りて岸あどふおる舟をいふ　光明峯寺家歌合　いくあり一風のあるべの

あまのかたむざけ
神代の美酒あり　神代紀下　以其田稲醸天甜酒嘗之　和　甜酒　多佐介

あまのかたをり
あまの竈の上の煙のかゝる處をのふちぐりの屋の上より煙の出る處ゆえ　ケムダシ　あり

あまのかりこも
海人の釣する繩あり　古今　戀三　のせの海のあまのつりなはうちそへてとのみや思ひこそしん
蜑の釣する舟あり　万十七　礒ごとふ海夫乃釣船もそふけりこぶ舟もそんいものおもふらめやく

あまのかりふね

あまのかりふね
祝詞式大殿祭　天乃鹿船　飛鳥乃神馬無久

あまのかりもの
あまのつりあい
あまのつりふね

あまのかりこも
つゝゐ折ゝさゝりゆく
果をゝもゝや

あまのかそぶね
浪の間ゐ思ゝぬ方のあまの捨船

あまのかたむざけ

あまのかたをり

あまのかりふね
祝詞式大殿祭　天乃鹿船　飛鳥乃神馬無久

あまのかりもの

あまのつりあい

あまのつりふね

あまのさえづり　吳竹集八　海士人のあやや行ける灰とのみやらふをいふ我戀ゐあまの捨蚕いた

あまのさなだ

あまのざこ　俗

あまのざけ

あまのつめ〳〵も　つめ〳〵も水霜の事ゆて露と霜との二ツ
かくのごとく　万四　久ゝの天露霜　ゆゐあ〳〵もその霜ハ天よりふる〳〵ものゝ名ぶかけり
家ゐる人もよもちとびぬ〳〵ん

あまのとのや　神代の田の名　神代紀上　始殖于天狭田及長田
とよさかちやに〳〵ぬ〳〵ん　詔ゆて造りたる海人の家をいふ　後撰雑一　物思ふと行てもとゞめがたきかこのあまのとのやに

あまのぬぼこ　依賜也　神代紀上　迺以天之瓊矛指下而探之　ぬハ瓊ゆて玉のうるはしきものゝ美称ゐりへり神代の矛をいふ　記上　賜天沼矛而言

あまのそごろも　神代の衆物の名あり　旧事紀四　大己貴神乗天羽車大鷲而覓妻妾

あまのそごろも　天皇御祭事の御湯沐の時めし給ふ御衣あり　江次十　主殿寮供御湯縫司供天羽衣

建久年中行事　御ふ物ゆゐとびらめしてらせ給ふ三枚ありて天の羽衣御ふとぎぬとそ更ゆ内蔵寮の御ゆるびとめしてもたらせ給

あまのそごろも　神の服あり　年中行事秘抄　賀茂大神云云夜夢天の神御子云各将逢吾造天羽衣天

あまのそごろも　羽裳炬火祭鉾待之

あまのそごろも　天人の衣あり　拾遺　賀君ゞ代にあまのそごろもよれゐまそかゞもつゝぬひてそ

あまのそごろも　竹　今いとゝ天の羽衣きるそうだ
君をまもれとおるひ出ける

あまのそぶね　神代ゆ吹革の用をなすものあり　神代紀上　又全剥真名鹿之皮以作天羽鞴

あまのそぎりのつるぎ　素盞烏尊の出雲ゆて大蛇を斬りたまひし剣の名あり　神代紀上　天蝿斫之剣

あまのそら　天の羽裳ゆて神の服あり　天の羽衣の干見合せべく〳〵

あまのそら　枕詞　ふりさけてそれぞ大君のみのちかき
ものぐ〳〵あまをとめ〳〵ら

あまのそら　天上をいふ原とより広き意　神代紀上　務時以来者非是善意必當奪我天原　万二　天原

万十四　阿麻乃波良ふり〳〵の名を山〇富士山ハきそゝめて高き山ゆてこゝもを望むゆ天ゆ

そびえてそゝりたるさま
つゞけてもいふ

あまのひらだ

神代の田の名平ある田なり 神代紀上 日神之田有三處焉號曰天安田天平田天邑并田天之照覽 給ふ眼といふ意なり 源 薄雲 あまのまなこおそろしく

あまのまなこ

恵心の竈の上の烟を出せる所をいふ 記上 唯僕住所者如天神御子之天津日繼所知 之登陵流冗之御巢而

あまのそそろ

あまのむらぎもせだ

神代の農人の長をさ〳〵ていふ称なり

あまのやせだ

神代紀上 又因定天邑君

神代の田の名農業の安き良田の義本文上に出せ

あまのよきづら。あまのうそづら

神代の鵜をいふ 神代紀上 伊弉冉尊生火産靈時爲子而所焦而神退矣其且神退

あまのり

○あまも○むらさきのり 冬月海中の石に着て生ずる時は緑生は緑なりて紫あるもあり、また黒乾せる時は紫黒きものを上品とせり或は中に樹枝を立置き、其木に着て生ずるを採る○紫菜 和 神仙菜 阿未乃里俗用甘苔

○あさくさのり○はむのり 武藏品川の産を最上とせり、此地ゆえの海類名 甘苔アリ 守 載開下 そもいふ御前のよきものゝよしあめもあらむ云云、うるあさのり

あまはおり ○あまどうふく

製作いさゝかの又後に合羽といふもの出来そもり合羽は慶長の頃より出来そもり雨胴服ともいふ近昔の頃より雨羽織ともいふ

もて具足の上に雨羽織を編笠を着し住吉を乗越〳〵て

あまはぐも

絹又紙などに油をひきて製せる袴なり

あまはせづくひ

天馳使の意ゆえ疾く行く使をいふ 記上 理其登毋許遠婆〇りてふ

伊斯多布夜阿麻波勢豆加比許登能加多

あまはだ 俗 ○まのはだ
井ドガハ 或ハ舟ノ漏ヲフサゲトモルモノアリ 俗ニ胴梱ノ皮ヲモテ造ル

あまもれ
雨の晴ヲヨロコブ 赤人集 あまもれの雲間ゆたらふあらはれ出を捐をきて今鳴さるもろ〳〵堅固あ〳〵めをとりふ 記上 御壽者木花阿摩比能微坐

あまびた 俗
虫名、あまぐものトル注ニ

あまびこ ○やまびこ ○ろんざもり ○こだもり ○やまおろし ○かやもり ○だいろう ○こもり
虫名、夏月水濕ノ所ニ生ズ、長サ八九分、蜈蚣ニ似テ背紫黒色、節多ク、足蜈蚣ヨリ多ク臭氣甚シ ものあり 本和 馬陸 神代紀 古字 蝮 同上

あまびこ
おやびこもよそのそものくちまねをするものよきこそもおくゆー
聲アルヒトノ天ニひゞくをヨロコブあまびこの音羽の山とつゞけうたふあるひ 貫之集 あふことのものゝ人めもこれも

あまびこの 枕詞
ひゞくを山彦といふハ同じ音羽の山ニひゞくを故ニ

古今雜 あまびこの音羽の山 ㊦ あまびこの物の音の空中ニひゞきてこたふるをいふ山ニ

あまびた
尼の截下げたる髪の額のところをいふ 源 妻 御あまびた引つくろひ

海士の下ニ注ニ 夫 卅五 ぬれ衣今ぞきつ紀ニうらにかづきしてけりあまのあまびと
天人の轉語 源 宿木 いかゞ人あまびとのうけうして琵琶の手をしへけるに何事も淺くて御琴さし置き給ふ 狹上 中將の笛の筥ニ給をそもありあそびてさそひ給へるニ

虫名、かうぐのびるもの
下ニ注ニ

あまぶね
魚をとる舟をいふ 源 若菜下 あま舟ニらうぐいあもひおろまけんあうの浦ニらうせ舟贖ようと出て罪を謝をるを云ふり 榮 浦々の巻 のとそもしあるくのひのまりけれがあまへて

あまふる ベニフルニ
ゆげよけり 大鏡八 今まそこ わうた 又 遺恨のこぎをそ

あまもやう
尼法師の義、女の僧をいふ

あまもり 音
苗名類聚往来皮 葬舞草云云 布曳雨誇

あまのを　○あまのを
　○あまのを
　虫名、皮をさり日ゝ晒し〳〵たる柿あり〇烏柿
　御湯殿記　享禄五年八日二位殿よりあまのを
　雨中のこゝろ　万八　うのそののまをを
　〳〵こゝろをとゞきは雨間もあうはこゝ

あまる
　あまたもる　又　久かたの雨間もあうは雲がくりあまる
　かりも　孫　又十　雨間あけて國見もせんを故郷のそをたちそゝぐ散ゆけんうも
あまる
　雨のこゝろ　新古哀　さゝ〳〵ちる春のはあまるもあ〳〵ね詠めせ〳〵ゆふ

あまも　能登俗
　虫名、こゝろぐさの
　下ゆ注はも

あまも　伊勢俗
　虫名、をぐさ〳〵の
　下ゆ注はも

あまんぎやこ　備前俗
　虫名、おゆのあゆこの
　下ゆ注はも

あまんぜる　ゼ〳〵ズ〳〵
　意ふこゝろひてよ〳〵とあもふ
　意あり　類名　甘シアマズ

あまめ　土佐俗
　豆名、そ〳〵ゆめの
　下ゆ注はも

あまめ　紀伊俗
　虫名、そ〳〵もむ〳〵の
　下ゆ注はも

あまも　俗
　○あもも。むく〳〵ほゞ〳〵ほぐさ。かゞめのおび　○さゝげも。さゝ花。○さゝふ
　○かゞぐづ。そば。もはは。○さゝぐさのおとひめのもとあひのきりさゞ
　海中ゆ生ど〳〵泥昌（ニシヾウ）の葉ゆ似て細長く生ゆ青く枯をゞ黒〳〵〇大葉藻

あまも　佐渡俗
　海菜、あゆのりの
　下ゆ注はも

あまり
　あゆるの體言あり〇餘　應神紀　訶羅怒烏之褒珥椰抴之餓阿摩離虚等珥菟句離、
　物をかぞふる十或ゝ百とつゞゆりたる
　其あらの數をのゆゆらあまりいふこと
　ようそ〳〵めて十所
　あまり一所

あまり
　りふ又上略しそのらこまりのらこ
　二つのかこち八十らきゆをたまる人のふこ〳〵あこをこそ　佛足石歌　こそち阿麻利　宇　國讀下　君たち

あまり　○あんまり
　けゆひたこめ〳〵れてとりのせゞあまりの源　帚木　るとびこゆ女〳〵とこれゞあゆうゆき
　ゆゆやの軒ちの雨そゞだあまりるあそめゆる〳〵袖うる　新古雜上　五月雨ゝ

あまりさへ
よ〳〵もぐる
類名 剣サヘリ

あまりのもの
あまる ラリルレ

あまもる ラリルレ
伊勢物語 あるゝ人のうたゆゑいまはとをつげやらぬ〳〵お身ゐあまるまでつねとう寺のたふとさのあまりてその火ゆでやけ候

あまや
あまやうま サシスセ

あまやどり
おのれさへあまるまで〳〵後撰 春下 あまりさへ人有て行べき年だにも春ゐかぎりまであふ

ヨケイ の物を
いふなり

分ゐ過きて ヨケイ あるを
いふ〇餘

物の餘りてあるを
いふなり

あまりや たゝごとや 唐物語 いつ〳〵父の御湯殿記 永禄六年 二日このあまり

僧の居る所をいふ 天武紀 下 橘寺
尼房 失火 以焚十房

自小児あどやう〳〵育るをいふ 十訓七 親のおもやう〳〵乳母のもてあそぶほどうひ〳〵雨をやむる間ぞ〳〵かげとゝそとゝをろを云ふ 催馬樂 あまやどりかさやどり

やどりてゐるうへんしぞれをきき 元真集 これうる女の家ゐ雨やどりせる時の間を山田りるらや人いそるうん

堀川百首 かり庵ゐあまやどり
今昔 サニ 雨宿しかた
家ゝ

あまもる エユエヨ
アマエタレル をいふなり 源タ顔 かくごとめしけまどがあまるえんといふふきこえんなど 又木摘花

あまよのつき
人ゝ雨夜の月ゐもや雲もそれ猶ぞ

あまよのそひ ○あまさうぞく ○あまぐ

あまよのつき
人ゝ雨夜の月ゐもや雲もそれ猶ぞ

あまよのけ 俗
雨を避る具ゐそ アマジタク あり
敏達紀 無雲風雨大連被雨衣
雨のふる夜ゝ月のこゝえぬものゝれがめゐそゝえぬたこくふのへり 玉葉 釋 弥陀たのむ

あまをとめ

あまをとめ

漁する女をいふ 万 三 海未通女
あまやくけむり
あまろをとめの下ゐ注ま 謡曲羽衣 これるかもあまろをとめ

あまそそぶ称 枕詞

詞とあるより大和の地名あり

あまそそぶ称 俗 ○やきそそぶひ ○さそらぶひ ○まそべそらち

あまてて紅紫の縁あり 紀伊海邊の多〳〵〇蛤蜊

あみ

あみ

あみ 伊勢 俗

あみいた。あんだ

あみうち 俗

漁舟をいふ 万七 海人小舩 帆 うもそれくそそるるうでふそてるのうへゆふふるこそれてそるこそ 万十 海小舩 そろせの山ゆ〇舩の湊あとふつもたたをそろるへこのへべそろせの挑

絲をむすびて方目を作り魚鳥を捕る具あり 和 罘罳 阿美

蝦の最小なる者をいふ

字 鼸鼠 古節 海揀

草名、闇の下ゆ

注せ

いゆへ人罪人を載る輿あり 編板の義あるべ〳〵 和 筺輿 類名阿以太 編竹木為輿

撒網を以て漁する人をいふ

あみおく 加キクケ

あみがき

あまそそぶ称 枕詞 あまそそぶ称 俗 ○やきそそぶひ ○さそらぶひ ○まそべそらち

あまてて紅紫の縁あり 紀伊海邊の多〳〵〇蛤蜊

あみ

あみ

あみ 伊勢 俗

あみいた。あんだ

あみうち 俗

漁舟をいふ 万七 海人小舩 帆 うもそれくそそるるうでふそてるのうへゆふふるこそれてそるこそ 万十 海小舩 そろせの山ゆ〇舩の湊あとふつもたたをそろるへこのへべそろせの挑

絲をむすびて方目を作り魚鳥を捕る具あり 和 罘罳 阿美

蝦の最小なる者をいふ

字 鼸鼠 古節 海揀

草名、闇の下ゆ

注せ

いゆへ人罪人を載る輿あり 編板の義あるべ〳〵 和 筺輿 類名阿以太 編竹木為輿

撒網を以て漁する人をいふ

あみおく 加キクケ

あみがき

あみおく 加キクケ

あみがき

網を張おくをいふ

類名 羅オク

物を編て作る笠をいふ後世の専ら闇を用て編るをいふ 著 たぐふ 垂 垂上下ゆ

あみがさ 俗 きそそぶひ

新六四 ゆきそそぶひのあとおきのうへゆ〳〵

介名、狀闇笠ゆ似て黒色、裡面の文理ハ松蘰の裀ゆ似〳〵り

あみがさくさ 俗 えのきさう

野草、莖の高さ尺許、葉朴ゆ似て、莖上梢あとがきの如き苞を生〳〵、小黄花をひ〳〵く

あみがさもち 俗

糕を圓扁ゆて餡を入れ両〻お折う包そる者あり

あみがさあり 俗

草名、そろ〳〵の下ゆ注せ

あみがひ 俗

介名、深紫色、細孔ありて網の如き文あり又白色の者あり 方七 たちそそのゆへる園ゆそそ〳〵ぎそそるへ〳〵とひ〳〵ろ〳〵安美佐

あみさそ サシスセ

散麻之乎 神樂譜 あのそふ〳〵そ あのそ安見佐須也

あみのおもだん 俗
夏日浦をふせぐ料ふ用ある簾神あり

あみもとね
網をもとねて手業とする者をいふ 宇治
おとなもとめるひつぎのあんれそうる

あみもとぞり 俗
網針ふ同じ

あみもする セスルスル
湯や水あび物ふ浴するをいふ 今昔十九
湯を浦〳〵て大衆ふ浴せむ〳〵て

あみそ 俗
網をあむ料ふもする麻線をいふあり

あみだ 播磨姫路俗
虫名、そづもの〳〵の下ふ注もと

あみだぐさ 俗
介類、狀よめざさ〳〵ふ似て大く笠の形ふ似〳〵るもの○老蜂牙

あみだぐう 音
茶事ふ用ある釜の名あり

あみづな 俗
網繩ふもある

あみど
竹やうの戸ふをもてあをせて戸ふ用ゐるあり 拾玉四 夕ざるのあり〳〵めを人や

あみどり
鳥なと網ゐて取るをいふ 方十九
聞どもあうぞ網取うふとりてなづけふ

あみどり
かもぜもなくぐ称

あみどり
杜鵑の異名なり 雑和集中
昔人云こみ鳥を網ふうけてとり置て明年

あみな 。あをうか
海士の用ある網のつるをいふ 夫木廿五
棚引ふけり春駒のこゑ沖の浦のあをの網あり

あみのき
木名、あふちの下ふ注もと

あみのき
康本 棟實 和名抄 美乃支
網のもとをいふ 散木中
こころあるあみなきぬ風の心なりけり

あみのめ 俗 。もめのあた
小草あり葉二分許両々對生もと
春月小白花を開く○雀舌草

あみぞり 俗 。あをり 。あをもとねをり
網をもくとね用ある具あり
竹又鯨髭を用て作る

あみひく カキ外
あみめ
あみめのま
あみを
あむ。あぶ
あむ マミムメモ
ある ラリルレロ
類名 編又纏ム 方十三 あみてるつくるもの
おなじあみのをちの小管不連ふりうりうちた
あん 音
作もる者ハ各條ヲ
挙ぐ○餡
あをを引くもり
類名 扯アミヒク
物を編もたる目なり 方十二 あみたるのきへう
竹垣編目ゆも妹ーこえるがごとしめやる
編目の間なり 後撰雑三 玉だれのおこめの
ようふく風の寒くいそへそいもとんあもひを
編たる緒なり 類名 維アミヲ
字鏡集 辮アミ
蚕類の総名種類各條ヲ分ち出せり
記下 多古辛良介阿辛加岐都岐
席をあむ簾をあむあじを
いふなり○編
あこそあるを
いふなり
あんかけうどん 俗
あんがふ 音
野條ふらをたるを
被たるものなり
自然と事物の合ひうふを
いふ○暗合

あん 音。ふもだまり
あん 音
かくせもりけり 盛衰廿九 古きものを
如く案ふも及もも是を書もさものを寫もぞ
あんい 音
こころのやすもあるを
いふ○安意
あんちん 音
こんと思もぞ汝一人あんちん
おくせそんや
あんろ 音
以修二功徳一○ 漢書天文志
宮車晏駕
天皇崩御をいふ○晏駕 文實二 三月乙己
晏駕之後初盈七旦仍遣二使於近隣一七箇寺
葛粉 山粉ヲ酒醤油ヲ和ー
煉て食物ヲ被るものなり
下書をいふ○案 太政官式 神祇副若佑持二
奏案一進二大臣一 伊 あるーある人あんをうきそ

あんかん 俗
安閑の字音より出て心をつとめ
ウツカリとしてをるをいふ
安きと危ふきとを云 太平六 上宮太子の其初
百王治天のあんきを勘ぐんて 慶節 安危
ソランジルをいふ
○諧記

あんき 音
樂曲の名 和性調曲 掻弾子
體源抄 安弾子
僧徒の諸國をめぐり修行
もるをいふ 下學 行脚

あんぐ 音
おろかなる者を
いふ○暗愚

あんぐう 音 かり
天皇京外ホテルもろもろの皇居をいふ
○行宮 持統紀 六年三月壬午免供奉騎士

あんぐわい 音 あんのおもふたがふ
思ひの外 違ふをいふ

あんけら 俗
愚かなる人の
形をいふ

あんご 音
僧徒の勅行する他出せざるをいふ
天武紀 十二年始請僧尼安居于宮中

あんごう
あんごうと称す 類聚往来 鮟鱇コウ
料理物語 鮟鱇いさゝかもそれ物
魚名、形扁圓ゆゑて大なり、長二三尺、琵琶ホ
似たるを以て琵琶魚の名あり、方今ハ清て
古節 鮟鱇ヲン

あんごう 丹波 俗
魚名、さんまのやうなもの
下ホ注ニモ

あんごう 安房上総 俗
虫名、ひきの
下ホ注ニモ

あんごう 伊勢 俗
あんまのやうなもの
あんまもてロをおほふる
形狀をいふなり

あんごり 俗
あんまもち
下ホ注ニモ

あんころもち 俗 ○あんころ
おちつかでそはそはするをいふ 又 アグラヲカク をいふ 慶節 安座

あんざ 音

あんざい（音）○あんざのーよ　もと天皇の御座所をいふ轉じて他所をもいふ
やどりともそもそも太平記音義行在所
あんざのーよ（音）　同上○蔡邕獨斷天子以四海爲家故自謂所居爲行在所猶言今雖在京師行所至耳
あんさつ（音）　○やどうち　容ル人ヲ殺害ス
あんざん（音）　○暗殺
あんさん（俗）　○安産　子をやすくうむをいふ
小く厚し、産婦これを持ば安産す云傳ふ故ふこの名あり○含生草　巴尔齊亞の産、舶来あり、長き六七寸、枝多く分る、内ニ巻屈せる葉形鶏児勝ニ似て
あんし（音）　太政官長案料紙留年料内三百張毎年打進ム
あんじそめる　サシスセ　あん（音）　タメスマスの意ナリ　暫ノ間ナドソノ事ヲムケヒ居ナリ案ジ定メヲルヲイフ
あんじち（音）　それぞあんじちごろ二三百ざうをうー　恵慶集　深き山ふそむひとりの許ふおろうてたづぬるふあんじち　かりふ作ル小家ヲいふ　古本和名抄菴室（俗阿无之知）小草舎也（のほめ）ト
ちあやをとりて人をまどはすくるくるそうきろくる
あんじつ（音）　上ふおろす　庭訓往来禮堂庵室休暇者先假葺也
あんしん（音）　心のやすらかなり
あんぜち　慶節　安心
あんぞやうきょく（音）　樂曲の名　和黄鐘調曲名、安城宮
あんぞやぐる（洋）　草名、石竹の一種、長大ゆゑて葉亦長し、花重瓣紅白又白質小紅點あるものなり
あんぞや（音）　僧尾あどの草庵を構て居るものをいふ○庵主
あんぞやう（音）　そこふ物をおぼえて口ふよむをいふ○諳誦
あんじる（俗）ジジズジルジレ　考へ思ふことをいふ　心配スル
あんじられる　レルルレレ、　あん
あんじさせる　セスセルセレ　他をして心配サセル
あんじる　他ふ心配セラレルをいふ

竹を編たる物後世のあじろ
和遷篠無名師路

あむろ
自ら物ゝ湯や水をアビセルと云ふあり
反正紀有井曰瑞井則汲之洗太子紀竟宴歌

あむせ サシスセ
うづの井こりふらしそこひまであむせ
ゆるさせこどものちひろの心をしらんこそ安全安康武
果名かゝの下ゝ注ゝ御湯殿記永禄五年
井五日あんらく光院よりのぐるのあんせ

あんせ音
ゆうねる古節
杏子

あんぞうめ。ゆちうめ俗
花色淺紅杏花ゝ似たり實酸味少く
杏ゝ似たり○杏梅

あんぜる あん音ゼジズズルズレ ジル
察爲るあて考むるをいふあり

あんぜさする セスルスレ
他をしてゝ考をあさしむるをいふあり

あんぜーむる メムムルムレ
同上

あんぜらる レルルルルレ
我ダあのぐらう考のあさるをいふあり

長明無名抄案じ過して竹こそ
中務内侍日記つぐうぬことのそあんせるを
やせくしてかくることのそあるのうさゝめく花
せのい大將軍一ゐんのうぞうえくしくの四のを
ちんぶーそそそーゑへふをんそ
おんせんをりくせ慶節安全

あんた。あうた

あんたい音
○安泰

あんだら俗おんけら
○あんぐう

あんだらふ同じ癌のやうなるもの

あんだらふ同じ癌ナコトを
盡さゞるの

あんだらつくせ俗
三衣の一ゐり、五條の袈裟をいふ○安陀會

あんたゑ音

あんち音
あぐめおくをりふ○安置今昔御聖體を取て本宮ゝ安置しゝ奉るなりと

云て盛衰其上ゟ二寸の
地蔵菩薩を安置せり

あんちふ 東國俗
みやとといふの
音便なり
弓を射るときの的をかくる處なり
和 射塚 以久波止古豆加 此間阿无豆知

あんど 音
その所を得て安心せるを云ふ○安堵
續紀七 遣建郡家爲編戸民永保安堵 盛衰四
隨分の思案をめぐらし向後の安堵
こゝ逃かくれもせず安堵せよ 小島品號
○又後世轉じて知行所を給もる證書のことゝもへり 謡曲鉢木ゟ
相違あらざる自筆の狀安堵ゟとりそへたびけもべ

あんどう 音
同じ

あんどうふ○あんぺいどうふ 音
蠻あんをかけたる豆腐なり 大草家料理書
あんどうふとりふ二寸許ゟ切て湯煮をして
さらふ入て上ゟらぢやうをかけて

あんどん○あんどう 音 ○あをんどう
燈火を點もの具なり 塵添壒嚢抄 行燈を
あんどんとよむ唐音歟行字をあんとよむ

ことに行在所等也 永正何曾合 御僧の
寮ゟ物ゟゝされしたり あんどん

あんどんのらうそく 俗
行燈の燈鉦をうるところなり

あんどんのあぶらざう 俗
燈鉦の下ゟあけて油をうるところなり

あんどんむし 越前俗
虫名、らまぢもの
下ゟ注也

あんな 俗
あのやうなるの轉訛なり アンナモノ コンナモノ
などのあんなあり

あんない 音○あない
あるいの下ゟ注をもるべヤウスなり 扰一
家あるじゝもべあんないのをよくもりて
あんい案ゟて下書なり トメガキ セシイガキ の
内の義なり 三代格三 應令諸國講師撿校
國分二寺事、右撿案内大政官去天平十六年
十月十七日勅又奏狀称伏撿

あんないしや 音
道ゟるべもる人なり 太平三 佐々木三郎ゟ
藤戸を渡りしゟ案内ものゟりさ
事を知らもる書狀なり 蜷川親俊記 昨日
内談延引之由執次代より案内扶なり

あんのう

あんのーやんぎう（俗）草履の名、あーのう

あんぶおうる（音）食類、ぶんの下ふ

注ぜ

あーふーうが（今昔廿八）何ぢう心を推量ドホリナル意ゆて考へのとうりふあうあり

かーいそれさうなこそうるのけまこと仰せ給けまば源（藤綱）かーー人のおーそうるあんふ落ることも

あんふさうねする（音）あんさうね（音）（太平三）東國の勢ともあんふ相違ーーとりやーー此城の

ていわーーー一日二日ゆ落やうでかうけるぞ

あんふれんぶ（俗）○あんうとの○あんのあう（スキリヤウヂガヒ）の意ゆて

○あんふさうねする　案ふ違ふあり

あんゆん（音）杏（アンズ）の人（すも）あり、中古食用ともせ（宗五大草紙）

もーーもんのこうりもの、さんまやーう左、

あんゆや。伊勢山田（俗）遊（あそ）女の下ふ

注ぜ

あんのごとく（音）あん（音）（勘）人あんの如くゆて此句を

（守拾十）あんの如く入来る人あり著四

あんむのこうり

こーー人もさめざうけり（太平九）城の攻（せめ）て思ひとうりーー如くゆて（推量のトホリ）あり

よう東八條河原まで五六八九寸の藻（も）長門（ながと）國阿武（あぶ）郡のそうらんうろ

あーこーふ屏をめう（又ホ）我粥（かゆ）ら〳〵と攪（かきまぜ）を打、五六八九寸の

安の郡あぐと鏑（かぶら）貫て、（闇）八十三間四方ふ組上て

あんのやう（音）○あんうとの○あんふれんぶ

あんばい（音）（俗）アンジワイ（ホおうの〳〵案の外あり（今昔廿五）今日の

内ふ寄て責むとて彼（かの）奴（やつ）の案の外もて迷（まよ）ふ

あんばい（音）（俗）按排の音ゆて五味を調和するとりふ後世

鹽梅の字を用ゆる附會あり（古節）安排

按排の音ようで出て味ひをととのひ轉じて

物のをうあひ様子のことふのへう（ヨイアンバイ）

あんばい（俗）アンバイガワルイ　あどの類ようで又病ゆて苦ーーむをアンバイノワルイ

やーー癒かーーふあうりあるをアンバイガヨイ　あどのへう

かそうることこそのーーやうのやーーと云ふことあり

あんひ（音）○安否（太平四）臣がけう中のあんひを存命の

あんぴん 音
中わるくしめ給へること

あんぷ 音
餡を入れもちる餅のるの

あんぷく 音
古節安否

あんべい 俗
腹を按摩するのる
○按腹

あんぺら 俗 ひらもげ
東國の方言あるべーの轉訛のる

あんぺら 俗
遊苧の類の水草あーそ其葉狹扁のり但ー船来もるあんぺらを織るるの此品よあーぶ船来もるところの一種の席あーて南海諸國の産のる

あんぺんがひ 俗
魚名おおかさごの下わ注也

あんぺんたん 俗
魚名かさごの下わ注也

あんぺんたん 俗
病ものをのるふ

あんま 音
身體を按摩するをのるふ又轉じて其按摩するものをものるふ○按摩人の體を按摩するをのる

あんまとり 俗 あんま

あんまさつせ 音
古へ按摩を教る師のる 職員令 按摩博士掌教按摩生等のる

あんまり 俗
あまりの音便分わ過きて法外なるをのるふ

あんまん 音
心やすく寢もるのる
○安眠

あんも 東京小児言 俗
贅の下わ注也

あんもち 俗
贅の中わ餡を裹めるものるる

あんもち 俗 ○あんころもち ○あんころ
贅の上わ餡を揉もるものるる

あんもん 音
下書の文のる○案文 大政官式 凡史生已上解任還替與解由者先修案文

あんや 音
暗き夜のる 大平六 大和河内紀伊の國わ有とある所の山々浦々わかぐりそなる奴

ところ〳〵うけり云云弥東西南北四ゆの上下ゐ
充満してあんやゐひるをくくうう

あんやうまあうせろ音
源氏表白 轉法輪の縁うくて是ぞ
窮盡淨利ゐむく給へくうう

あんよ俗
あゆうの轉訛ゆて小児の歩行をゐとらひ
又轉〳〵て足のことゐもゝ

あんらく音
やをくたのしきうり 盛衰ハ 邯安樂ゐ屬
まるところゐ又臨幸あらバ天下の滅亡欤
樂曲の名 和 沙陁調曲、
安樂臨

あんらくえん音
形狀、楓檀ゐ同〳〵く、春の末淡紅花を開く、
實ハ擇擅より小く香味微く異うり ○安閑

あんらくじ音
湯又水を アビル をのあうり 古今別 源のさねが
つくくゐゆまゐむくてゐうけるる時ゐ 枕七
あめ。あま
虚空をのふ此土より仰ぎ見をバ蒼々と
そゐる故蒼見とのふことを約めてあめと
あめ 膳所 籠中抄四 水をあまそゝ 類名 泳ア

あめ。たる糸
糯米ゐ蒸、熟きうち麥芽を入を熟湯を
加へ擂り、釜の中ゐ入をて煉りうる物あり

あめ 天より落る水あり 和 雨阿和名女
水従雲中而下也

あめ 膠飴錫通じて称ゝ 本和 粘阿和名
和 飴阿和名 米蘗煎也

あめ 尾張俗
木綿ゐ蓬を入て細長く造りたるもの
紡車ゐて綿を抽出料あり

あめ
形狀、あめのうをの下ゐ注ゝを 和 鯢阿和名、米
似鱒者也楊氏漢語抄云水鮭一江鮭、

あめ俗
介名、よめのさゝふ似て長さ一寸餘
肉色微紅、味甘〳〵

あめ 山城伏見俗
虫名、そゝをゝ〳〵の
下ゐ注ゝを

あめいし俗 ○うゝのあめ
石名、外色粗糙ゐて打破をバ
其内色膠飴の如〳〵

あめうり 俗
錫を賣る人をいふ

あめかも 俗
飴を煉たる漿をいふ鳥獣を畜ふに用ゐるものあり

あめかも 遠江 俗
虫名、そうぎもどきの下ゐ注に同じ

あめがした
和泉式部日記 あまのせんぶきこえきこえ
太平三 さしてゆく笠置の山を出しより雨がした
天下あまねくの下ゐ注に同じ

あめかた 西國 俗
虫名、そうぎもどきの下ゐ注に同じ

あめきり 讃岐高松 俗
上ゐ同じ

あめくち カキクケ
ワメクとのゐ同じ ○嚢 枕二 さけのこてあめくちをさくりひげあるものいそれをゆくゆくと見ゐ 宇拾五 異口同音ゐあめきて

あめざらく 俗
錫ゆて、鳥獣人物等を作るをいふ

あめしづく
さゐ雨しづくとるあがれぬるうゐ

あめしづくとゐく
いうゐふきたりてあめしづくとうゐくるゐとゐくるせそ

あめそそぎ 信濃 俗
前條ゐあるごと 吉野拾遺 下 髙野の山ゐの名もて髪おろし けり三歳をうりありそこらを
虫名、そうぎもどきの下ゐ注に同じ

あめそそ サシスセ
万二 ひさかたの天所知流きみ
又三 久かたの天所知奴禮ども
天ゐ神上りまして天上を知ろしめせゆて皇太子尊の薨御給ふゐへりあめそそぐ雨ふつもひもまくふこひもそたるもあめそそぐ雨ふつもひもまくふこひもそたるもいまろびひろちゐけどもせんすべもなし

あめだう 西國 俗
飴を拵るものあり 三十二番職人歌合 糖ゐ飴を拵るものあり、さ月ゐやまごもるものこそもあり糖うり、さ月ゐやまごもるものこそもあり

あめだそう 筑前 俗

以上、虫名、そうぎもどきの下ゐ注に同じ

あめちまた

やう〳〵あめてあるもの〳〵
かざり粽ハ

あめつち

あめつちの（枕詞）

あめつちのふるごと

あり〳〵今も春袋とて、女子の袋をぬひ
あるとり右」あめつちの袋の數し〳〵多くもと思ふことあるひあるもあるを
狹三「あめつちをふくろにぬひてこと」靖中「年ごろもちくるあり」聞えるをひ
袋ぬひてこと誦するふのとてとり〳〵
ようもむべき歌、あめつちを袋ぬひそさのをのみこともたれが思ふ事ぞ〳〵
よりて女房私記正月御鏡のうちひ祝ふ時

あめある（枕詞）○あめあるや

方七「天在ひめもすもらの又十六「天尒有哉
つげて日賣管原とのふ地名ふのひらぐ〳〵たるあり巻十六あるい天ふ
さゝらの小野ふ○巻七あるい天ふある日と
わくあり巻三ふ天有左佐羅能小野とあるい即ち天ある地をよめること
明ふあるをがこれをもて天ゆもさある地のあることを知るべし

あめのあ〳〵

ゆるぐともふとぞおどろくる〳〵
おろるあるこゝろふ物をおもふ
拾二「ゆる人もおどろかる夜雨のあ〳〵風のふき
詞上「ふる雨のあ〳〵とも」

あめのいそと

某とりつゐ此土ゆて天上の物と事
天降ゆま〳〵時天より持来給へる物ゆも事ゆもたぐひなめて
あ〳〵ひそまる事ゆりへるぐ廣く〳〵
とりへるもあり下ゆ出せる詞どもも此四ツをもて分別〳〵て見るべし

あめのいそや

天石窟ニ
所住神

あめのいそもと

○あめのいそと
○おほのいそと

也「神代紀ニ立於天石窟戸之前ニ」
項作俳優ス

あめのうき

虚空の蒼きを海ふそれてそりふ記上「故於是天照大御神見畏隱天石屋戸而刺許母理坐」万七「天海ふ雲の波ゝち月の船星の林ふ漕かくるを」

ああのうを ○あめ ○こぐぢみ 狀、松魚ゐ似て脊上尾ゐ通して、黒甲あり鱗細かく、大なる者ハ二尺ゐ至る、肉白く又淡紅なる者あり、古へ近江より貢せる事あり、今も近江さゝ川より出せど○鮎魚主計式阿米魚六斤内膳式近江國阿米魚

ああのうを 俗 魚名、さまざまの下ゐ注ゝ也

あめのうなのせ〳〵 あめのうなの鮹あり 主計式上 近江國中男作物阿米魚鮹

あめのおきそ 天上の法則ゆゑ天御サダメあり 宇後釜 天のおきそ有てあめのしたの琴ゐ紀そゝうろ

べき人ゆゑん有けり又 もゝあめ國毗女御 ともゝよゝ、おきそゝうろ〳〵あら天道ゐゝうも也奉る天のおきそあり〳〵

あめのおしがを 神武天皇を称〳〵奉る天神御子の御軍の向ふ所いらるゝる敵もたちまち小政らるゝ

ことを物を壓ひしぐ〳〵如き御威勢なるをかゝ〳〵申〳〵ゝうあり 神武紀 兄磯城忽之曰聞天壓神至吾爲慨憤時云云時弟磯城倏然改容曰臣聞天壓神至旦ダニ畏懼

あめのおしを あめのおしを誤りゝうよう出来ゐる詞あり 万三久ゝうの あめのおしをやこゝもゝよゝん秋の芽ゐる月うげ

あめのかぐや あめのかぐやの下ゐ注ゝ記上 持天神所賜天之波士弓天之加々矢帥殺其雉

あめのかぐを あめのかぐを賜天鹿兒弓及天真鹿兒矢遣之

あめのうれぐる あめのうれぐる 雨のふる日の暮がをいふ 拾遺貧外上 ゝうりもふ汀のゐゝも打そよう汀蛙鳴あり雨の暮ぐさ

あめのをゝた ○あめをゝれ 天の時雨あり 万二 うらさぶるこゝろさまし〳〵久ゝうの天之四具禮のをゝ〳〵ふことばぐ

あめのてるぞ 下之政 神代紀上 何不生天下之主者歟 万五 よろづよわりゆ〳〵わがもひそ阿米能志多ゐそ〳〵れゐゝもねみゝとぎゝうぬ 又十六 ゝもあろぎのをゝたゝ

ああのやしろ 國土の總稱あり 高天原ゐ對へて此國を天の下とのゝり 記中 坐何地者平聞者天之主者歟 万五 よろづよわりゆ〳〵わがもひそ阿米能志多ゐそ〳〵れゐゝもねみゝとぎゝうぬ 又十六 ゝもあろぎのをゝたゝ

ああのやしろ 俗 ああのてるぞ

あめのをゝん 俗 あめのてるぞ

言葉苑 巻四 あめ

あめのやしろ 雨の脚とゝうふゝうして手ともひそ雨の手のしぶきを手數とゝうくるゝうり 細き竹をゝう綿の中ゐ入て手ゆゑ轉〳〵ゝうちを空ゐゐる具あり ○笹

為忠集 降そもるあめのてうぶの花の
色の深さとそ〳〵こそもれ

あめのとりふね

神代の琴の名、ぬの璽ゆて美称あり 記上 即
諺天鳥船 神代紀下 高橋 澪橋 及
天鳥船亦将供造 取持其大神之生太刀與生弓矢及其天沼
琴而逃出之時其天沼琴拂擬而地動鳴○普通本ゆ
詔琴とあるはあやまりなり

あめのぬぼこ

天上の井あり ぬ〳〵しき水の湧る所をいふ
○いさのそらのお 天の字同じ 真名井をいふも真清名井とも
約たる名あり 神代紀上 素盞嗚尊以其頸所帯五百箇御統之璽
灌于天渟名井亦名去来之真名井而食之
所賜天之波士弓天之加々矢
射殺其雉

あめのそとぶね

檣の木ゆて造る弓あり あめのゆふつゞ
ゆふの下ゆ注ゆ記上 即天若日子持天神
神代の船あり 神代紀下 熊野諸手船 亦名天鳩船
釋紀八 鴾船者速鳥之義、速迅之謂也

あめのそびと

古事天之波波矢 賜
天若日子而遣

あめのやまびこ

人ゝ天つ神の産霊ゆりて生るものゝ
るまでがあめのやまびこゝゝまでこゝの死る
より生ゝ多かるまでゝゝ
天之益人等我過犯縁雑々罪事 祝詞式大祓 國中ゝ成出武

あめのやまびと

真ゝゐもるこゝゐるゐ魚ゆて飯ゆそゝて
食ふ物あり 魚類の料理 のこゝをいふ 記上

あめのそびや

あめのひろう

あめのよ

あめのやまびこや

ゝこゝゆ同じ ゝそゝやのそびや羽張の
やまびこゆゝゆ同じ 神代紀下 乃賜天
鹿児弓及天真鹿児矢遣之

あめのやまびこを

古事天之波波矢賜
天若日子而遣

あめのやまびと

より生ゝ多かるまでゝゝ
天之益人等我過犯縁雑々罪事 祝詞式大祓 國中ゝ成出武

あめのやそね

あめのまねへ

あめのまかげ

かくらふ 祝詞式祈年祭 皇御孫命乃瑞能御舎乎仕奉礼天御蔭日御蔭登隠坐氐四方國乎安國 登平久知食須我故 万一 高知るや天之御蔭あめのやそね

あめのまかど

美加度をうけつもゝの物のそなをもも申奉るのり 万廿 うゝらゝや安米乃まかどに

あめのまかご

あめのまもら

あめの貴ぶ詞そあめの酒を醸す器そ 祝詞式神嘗祭詞 天能賜和ぶ齋斛乎斗氐

天のとりふね天上ふねる殿舎の柱のさまを作り立たるをふ故ふ添へていふのり 記中

見立天之御柱、見立八尋殿、 神代紀上 化作八尋之殿又化竪天柱

あめのまもら

於天上也 神名式上 大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座○こゝろハ風の神とあがめいはゝ

あめのむらくものつるぎ

素盞嗚尊の八朶大蛇を斬て其尾の中より得給ひし劔 神代紀上

神代ふ天と地とを支へ持つ物をいふ名そのり

神代紀上 是時天地相去未遠故以天柱擧

うゐ皇孫命御天降の時皇祖の大神より授うり給ひて並々傳へまつる三種の神器の一まり真物ハ故ありて今尾張熱田の神宮ふ鎮ひ奉るのり

神代紀上 此所謂草薙劔也、一書曰本名天叢雲劔、蓋大蛇所居之上、常有雲氣故以名歟、至日本武皇子改名曰草薙劔矣

あめのもち 俗

あめのやそものかそ

天上ふある川そやそ瀬ふして弦瀬の義そのり 記上 各中置天安河而宇氣布時

やそ瀬の川邊の廣き處をいふ記上是以八百萬神於天安河原神集々而

あめのやせのかそら

上ふ同し 古拾 高皇産霊神

會八十万神於天八湍河原

ああのやそのかぐら　上ノ同ジ　神代紀上　其血激越湧於天八十
湍中所在五百箇磐石
ああのひころ。ああの貴ぶ詞やそい數多きをいふひこうの
土ゆて製〳〵たる皿ゆて神供の器物うつ
記上　嶽ハ王神化鵜ニ入海底ニ出磨之波迹ヲ
作ニ天ハ十毗良迦一

あののやちまた　天上の衢をりふやい弥ゆて方々へとれ行く
岐のこうも有るをりふ　記上　居天之八衢一
而上光高天原下光葦原中國之神於是有
神代紀上　有一神居天ハ達之衢一

あののをそぢ。いつのをそぢ　伊弉諾神の迎具土神を斬給へる劔ぞり
あめい美称をそうい鋒の方の張りこうを
いふ　記上　故所斬之刀名謂天之尾
羽張亦名謂伊都之尾羽張

ああびと　天上の人とりふ義佛書にうり出たり
續後紀十九　加ハ八十里地ニ芥子拾布天人波
擎手天不拾
成如

ああびと　皇京の人をりふ皇京をが常ゐ天ゐ比しても
いふぶ故ぞり　万十八　おそぎうるひとのこや

こゐ安米比度のかく戀せこぐ
いけるものろ〳〵ぁり

ああふし　俗　薩摩山中ゐありて雨中ゐ出づ形石決明ゐ
似て痩て殻うきこものうり　○雨虎

ああふし　俗　○あうべか　○うみうし　○うみうさぎ
○べうど　○さうり　○うみうし　○あそち
海産の生物ゆ〳〵そ諸國海濱ゐあり、沙喫の類ゆ〳〵そ形蛞蝓の如く
肥大黒褐雑駁色うり、頭ゆ角の如き肉二本立つ、人こまゐ觸うゑ時ハ背
上より鮮美の紅紫汁を噴出し〳〵身を隠すこと
烏賊魚の墨を噴出すゐ同ど〳〵、

ああんど　近江伊豫大洲　俗　同上

ああんどう　俗　○あめんどうも
扁く其仁食ふべし、西洋名アマンデルとりふ轉ぢたる名ありて漢名巴旦杏と云
但し今世ゐ巴旦杏といふ果樹ハ李の類ゐしてこゑて別あり　○巴旦杏
巴児齊亞國、突噜吧國、等より来る、常の
杏核より大ゐして黄あり、一種の桃核はそ

ああんどう　俗　○かうう　○えどう
○せいようが
桃の一種、高五寸或ハ一尺許ゆて花實あり
花ゐ千葉單葉紅白等あり　○壽星桃
虫名、こゑ〳〵ぁり〳〵の
下ゐ注せ

ああんどう　薩摩　俗

あめんどうそ 俗
果名、あめんどうの
下ゐ注ゝそ

あめんぼ 伊豫吉田 讃岐丸亀 俗
虫名、そうそあう〳〵の
下ゐ注ゝそ

あめんぼう 備後 俗
同上

あめんぼう 俗
錫を條ゐ製〳〵たる
ものあり

あめもよ
雨の ボタ〳〵フル とりふあせもよめきてもよのもの
ようふあるの〳〵 後撰十四 そゝとこのきうへでこゝ
ありく〳〵て雨のふる夜ハれわたりぬ
まろうちどれわれ〳〵まきこめまが雨
りとあり〳〵ろ〳〵咲たる所ゐ雨ふ
雨もよふらをぐべ〳〵やう秋萩の花 そるとそれこぼさとゝもぞそる

あめやかんざう 越後新潟 加賀 俗
虫名、そうそあう〳〵の
下ゐ注ゝそ

あめやのおろ 豊前小倉 俗
同上

あめやむ マミムメ
雨の止むあり
字鏡集 霢ヤム

あめやむる メムムルムレ
雨の晴間を待つ意あり 後撰 於下暮そくぶ
月を待べ〳〵女郎花あめやめてとや思ハざらまん
天を待月あり 万三 久うさの天歸月を
つまおさ〳〵ろ大王ハきぬぐさふせり

あめやめのおろの
注ゝそ
父母をりふあもハ母まろ父まて東國の方
言あり 万廿 つくひよみせぐくゆけ〳〵る阿

あめやめのおろの
下ゐ注ゝそ
古への東國の方言あり母ゐ自とりふ
あるの〳〵 万廿 阿母刀自もれそあるがもや

あめやめのおろの
虫名、あめやめのおろの
下ゐ注ゝそ

あゝる ラリルレ
天ようらゞたるをいふ 万廿 たゝちわれけ阿毛理ごとをめろぎの
歎聲 記上 阿夜訶志古泥神
皇極紀 咄嗟

あゝや
文の義にて地美しき絹をいふ 和 綾 阿夜
似綺而細者也 新猿樂記 四郎君受領郎等

あゝや
云々 常陸 綾、紀伊國 縑

あゝかき
文垣の意にてとゝろの類なり 記上 阿夜
加岐 能布波夜賀斯多尒、
海上の妖怪なり 謡曲 船辨慶 のふ武藏殿
この御船にあやうしゝ附て候

あゝかゝ 俗
魚名、ごぞんざいの
下わ注也

あゝかゝ
あゝかる ラリルレ
物わ觸もて似ることをいふ〇肖 拾遺 雜恋 かぜ
早くみ狩の葛葉のともとそもゆあやうし
やまと紀人のこゝろ 林葉集五 わ
らはどうあやうしあやうしの心あるべし
たのめおきしようほとあるべど 慶節 似

あゝかき
樂曲の名、四人立の舞あり 和 高麗樂曲、
阿夜岐理 體源抄十 綾切 大曲 劇舞

あゝぎり 俗
木名、あをぎりの
下わ注也

あゝゝ
あゝゝきの體言 ラシギ 又つ約めかもる意
より轉じてあゝゝきたるものゝへり
又 ものゝ小家あれども故有て住あらたり 又 古 賤の鞍置て
ラシギ 又常ふるもりてあど云意あり〇怪異
又非常 又不審 万十一 のものおもうとゝろ
源 景本 あやゝゝもこゝろとある
あゝき シキ シキ シキ
キメウ の意あり非常あるを嗟嘆するあり
悋異ともとれあるべし 古今序 山のべの赤人と
いふ人ありけりうたふあやゝゝ
たゝまうけり

あやしき シキ シキ シキ
吉きあるをもとゝ常ふかもそ
もとのふりて出たり 天武紀下 瑞鶏
万一 神亀もあゝ九代とのごとの
川わうちこゆる
あるまじくけゝうとゝぬ心のあるをいふ
景行紀 獣心

あやしきこと
源桐壺 うちそへてあやしきまでおぼしたり 又法外ナコト 又ミグルシイコト などの意ホノヘリ

あやしぶ ハヒフヘ
見候ぬあやしぶたる者仁於伊天古布加仁
尋聞候そん能々尋問そん須留ゐり

あやしむ マミムメ
悋異ホ近きをいふをむかへいふをむるどの
をむるゐり 盛衰二尺三寸の鞘巻をぬき云々
あやしむる悪き者ホ一當あてそやうに

あやしび
フシギナコト ゐり
悋火の義ゆて其起るよう
知られぬ火災をいふゐり

あやしぶ バビブベ
あやしむの轉 フシギニオモフ ゐり 續紀廿八 甚
希久異ホ麗 彼雲七色相交天立登天云云

類名 奇シアヤ

あやしむの體言
◎怪
意ホ悋異ホあやしぶと同意ゐり
他ホフシギニオモハレルをいふゐり

あやしむる レルルルレ
類名 異シアヤ 源桐壺 あやしうかたちなどの人ホやすぎれて見侍まじ

あやしめ サシスセ
血まる汗あどを出そをいふ 宇後落 おのづからぶきの血をさ〜あやしめて 又梅花笠 ちり
意ホ悋異ホあやしめそと同意ゐり

あやしき
拾遺神樂 おひあげも平野の原のあやしきかしひのうや 藻九 あやしき云々 海人藻芥 十三歳以前の人ハ
あやしき杉の扇を持也 綾杉と黒き杉の木ホて作るゐり
刀劔の心三紋の胴の裏面あどホ
人字紋を連絡たるをいふ

あやしき ◎俗
語園巻四 あや

あやぢのまろも ぢ俗
中宮大夫爲加冠引出物自殿
五重織襖一重綾地摺裳
寛弘六年十二月十四日戌剋太九加元服
被引鹿毛馬云云

あやつり

あやづり 近江俗

あやつりゆみやう 俗

あやつる 刊刊刊

そゝ思そざりけり唐錦あやつるをだにそぢそのつぎめ〳〵をるきりあやつりて盛衰高範御車を廻して
あやつるこゝろ
機のあやつりをする音あり
朝光集 上ル出ス

あやな

こゝひこゝろ〳〵ル 續後春上 梅の花
あやなむ〳〵の人ぞ戀しき
無文の義ゆて ワケタヽナイ 意あり 古今春上 山吹はあやな〳〵さ花そ花そんとうあけんきこゝろ

あやなき 刊刊刊

ワケノワカラヌ を
ワケノワカラズデアル を

古今春上 春の夜のやみはあやなし
夏輔集 殘千鳥あやなうち行末のあふさの濱のあふさもまもうむ

あやなぐさ
篠目抄ル杜鵑の異名ともせ

あやふ

あやふのあやふのこゝろ、ゆい難あり 奇妙ニイウヤウモナク タトヘヤウモナク るとの意ふのひ或ハムヤミニ メヅチヤニの意ゆも轉じのり記上毛毛那賀爾伊波那佐牟遠阿夜爾那古斐岐詐志夜知富詐能迦微能美詐登雄略紀擬蓂利矩能播都制能夜麻播阿野俗ゆ羅虞波斯阿野俗ゆ羅虞波斯、万二うふごりの文爾ともしき高照日の御子 又六 かけゆくも綾爾かゝくもゆくも綾爾かゝくもあふ妹〳〵安夜爾うふも 又十四 あふそふ妹〳〵安夜爾うふも

あやゆゝ
こゝそこゝふで
ゆゝゝ

あやゆく。あのゆく
おろ〳〵ふれたゞひて イヂワルキ ありて 字 堅 阿也ふ久 類名 咄又青ニア 字鏡集 青ニア 躬恒集 をゝめ
ぞや花のちるゝ〳〵んあやゆくゆ
らまろかようまでと思ふ荻の葉ふあ
やゆくふふ〳〵風の音うゑ 新葉秋上 夕

あやゆくごゝろ
イヂワルゴコロ ありて 源行章 さゝべきつのぞあゝべ
あゞまを御心を云云ゝとゝのどうき
いとけゝ〳〵ゝゑ御あやゆくごゝろ
人の御こゝふあびきゞゆゆゆるゝてんと
もあゝんとやゝゝゝる

あやゆくだろう 外刊刋刊
アイニクヂヤトイフフリ ありて 今昔 九 腹立てとゞめぬ
せろ 又 然こゝそあやゆくだちつま
ゆゝ〳〵人のあゞこふをろいゆゝゝ
とゞものゝゝりけまゞ 無名草紙 ゝろ
ゆゝくだち心づよく

あやのこゝそ
綾ゆて調ゞたる小袖あり 慶長記 石治部
出立いちやの綾の小袖ゆうゝいあさき

あやの〳〵〜音
織部司の被接、機織の文を掾るものあり
職員令 挑文師四人掌挑錦綾羅等文 續紀 卅

八月丙辰始置太宰府
綾師

あやのひたゝも
綾織物のひたゝものゝふ 平家八 足利ゞ其
日のあやうぞゝいちものあやのひたゝもふ

あやのびやうぶ びやうぶ音
綾ゆて張たる屏風あり 宇藤原君 やまとあやの
ゝゝおひゝゝそあろうあやの 屏風

あやのゝも
綾ゆて造まる裳あり 裳ハ女官の服 宇菊の宴
えび染のゝ孫の織物ゝうのおんぞあやのゝも

あやのゆまき
湯あゝの時用ゐる衣の名綾ゆて造まる
ものあり 宇藏開上 南湯殿東宮の若君の御

あやはゞき
山伏の被る笠あり 掃帚の薄庁ゆて作る
あゞろ笠ゐ似て少〳〵異あり 増鏡八 さゝ
ころ資朝も山伏のさ孫〳〵そ
うゝ人忍びてろだまり〳〵ゝ
柿の衣ゆあやゝて笠とゝふ物きそあづゆの
事あり

あやひゞき
掃帚の薄庁ゆて編たる垣根あり 天卅一
あやひゞきたゝそへだゝそるあるゝゆそる

ある虫の聲ぞ
きこゆる

あやふき 形シク
危

あやふる ラリルレロ 危
の

字 陷阱也 賢心 至淺之思其不然哉 後撰雜二 へだてける人のこゝろのうきをみつゝ
ふをりやせんとさまざまに 源若菜 見おとりやせんとさまざまに
あやふ〳〵 千載釋 らちもなくあやふ〳〵
もとたづの扳田の橋も今こゆるかな

あやふぐき
危き所ゟ生れる草をのふ 枕三 あやふ草ハ
岸の額ゟ生らんげゟたのもしげ〳〵まろれ
あやぶむの體言〇危

あやぶき
類名 厄アヤ

あやぶむ マミムメム
危くおもふこと
うれふ

あやぶまる レルレルレル
他ゟ アヤフクオモハレル を
いふゝり

あやぶまる レルレルレル
我ゟ あのづゝ アヤフクオモハレル を
いふゝり

類名 厄アヤ 以字 危アヤ 散木中 あふことのかたきの双をもあやぶむる人の
こゝろのあやぶきをも〳〵 拾玉五 跡ハをも〳〵とそぞろに庭の雪よあやぶきを
たるきのふけふるる 本願抄中 佛もものをと
あやぶむ願力とのや〳〵むまうのるぞ

あやぶむる メムルム
あやぶまれの體言 類名 咎又 愆又 錯アヤ 允恭紀
無仁紀 狹穗彦王謀反欲危社稷 砂石集四
舉失正狂 繼體紀 補闕 元良親王集 忘らる
書ゟ云〳〵人を毀りてゝ己ゞ過アヤ
危ふめてゝ己ゞ落む事を思へ〳〵とのゝり

あやまち
身ゟ我〳〵のあやまちゟゆて
だゟこそ思ひたえぬるめ

あやまち タチツテト
あやまちの體言

あやまちたる レルレルレル
我ゞあのづゝ シアヤマラレル を
いふゝり

あやまちたる レルレルレル
他ゟ シアヤマラレル を
いふゝり

字 謬 別也 通 類名 失又 誤又 瑕アヤマツ 源少女 うきふしみぢの陸奥につきむをあも
あのづゝ あやふゝ物語ゆもあめれど 新勅雜三 墨うあ危

星の光をあらぎてもあやまちぬ身を猶ぞうらむ古今春上やどちく
梅の花うぐひすあやまちなくは人の香ゐあやまちもこけり

あやまち

あやまりぎょうもん ㊎

あやまりたぐふ ハヒフヘホ

あやまる ラリルレロ

あやまれる ラリルレロ

類名 過又失又謬又錯 字鏡集 訛マヤ 神樂服誓 ヨロコビヤ一夜ヒダシマヒ
あやまりもてうまつる伊ちぎれることあやまれる人ゐ

あやまる ラリルレロ

奉らんを思ひこそされたてうみゐ
あやまりてうちもへうーこうぐ

あやまる ㊎ ラリルレロ

物のマナガフをいふなり 安寧紀 陰陽
謬錯寒暑失序

マナガフを
いふ

誤てあるを
いふなり

古今春上 やどちく
梅の花うぐひすあやまちなくは人の香ゐあやまちもこけり

あやまるの體言 源摸莊 本性のことあつうゐ心
ようこめ紀給へる人のときぐ心あやまりーて
過ちをいふ
怠状をいふ

他をーてワビイレサセルをいふなり

他ゐワビイレラレルをいふなり

あやむ ラリルレロ

織もの〜席をいふ 万十二 ひとりぬることをいふ
めやも綾席をゐあるあやぞゐ君をーゐたん

他を愧あり不審ゐあるふことをいふ
俗言ゐ人をところをものふなり 源 末摘花

あやめ メムメルメ

あやめ給ふもあやーく 千載 戀三 おもてもく涙の
かくる草よりも露しげーとや人のあやめん 唐物語 心のうちいきどあり
ふうけれどもこれをあやむるのうもと人のうまもとう あやむる人さへふかし 山家下 おもつくる

あやめ

縫をかくりへ 万七 住の江の
漢女と座て縫つるころもぞ

漢の女をとりへ人雄略天皇の御時
呉國より衣縫女を獻るよりて衣

あやめ

古今 戀二 郭公あやめもそのとぞあさく
源 螢 あやめ草あやめもあやしぬ戀もせるる

あやの文理あるをいふめり織目ゐどの
めのごとく ワケ 又 シラチ ゐどの意あり

あやめ

蜻上かくれぬおふるかをを
あやめあらそふもをもふるふるを

草名あやめぐさの下ふ注を伊あやめふ
君ハ沼ゆゑよどひける我ハ野ふ出てふるぞ

あやめ俗

よびくき後拾夏つくも江のそこの深さをよそふるふる

草名そのあやめの
下ふ注を

あやめ

りくと古大臣殿ハ難ド
給ひけり

八雲御抄ふ蛇の異名とを童蒙抄をあやめとハめのこころべからものあらをこそ

あやめ

○さろぶ
○あやろぶ

重の色目あり河海表青裏白胡曹表青裏紅梅物装面青裏濃紅梅雑事抄表薄

紅裏青ト安四季衣服あやめ
あやめ

あやめがさ。あやろぶぐさ

木劔を作り新ふ男児をまもるけなる家ふ贈り賀とを京花集吾國五月五日
都人出遊被菖蒲甲執菖蒲乃一日之中百戦百勝盖防胡滅賊之兆也

小児の玩具古へハ泥菖を二所束猶劔の
帯取の如くニ腰ふあびくるを後世ハ別ふ

あやめかぶと

らは玉あやと色々ふおゆくまる
結構菖蒲甲即學合戦京花集

あやめぐさ

多くハ此葉を端午の佳節ふ用ゐるゆゑ
一名菖蒲和名阿也女久佐万三ゆとも

あやめたむ。えびをふ。そひくこさ。のろち。あひものをらくさう。のくへり。
○はうをを。のこぎりぐさ
○そんぴさう
○だんごいらぐさ

開く筑りて球をうをとて筆頭菜の如くハ
又紅白粉紅等の品あり本和地楡和名阿也女比須介

あやめだんご俗

小き糕あり其串四亞ふ分ち亞毎ふ四を
散く其形溪蓀花ふ似たるゆゑハふ
緑もりだんご餡を抹まる
ものあり

介名紫色の蛤類ゆくて之を三ツ寄る
と紀ハ溪蓀の花ふ似ゐ因て名つく

あやめをかぶるのさふふつろりてかぶる
あり増鏡三五月五日所々より御ふぶるの花

園大暦五文和四年五月五日昨日下渡供童等

京花集あやめがたるの條ふ引けり

葉根及花共其形総て石菖の如く
○あやろぶ。
○あろをぐさ
くて大ふ其長四五尺ふ及ぶ香氣ふ

泥菖本和昌蒲和名阿也女久佐和昌蒲

ゆゑ端午ふ用ゐるあり○
ときハ鳴き月ゆゑあやめ草花橋を王ふ似

あやめどり　篠目抄ふ杜鵑の異名ともせ

あやめのおびもの　五月五日供御ふ奉り百官ゆも給そるあり内藏式造五月五日菖蒲珮所云云右料物外十五條内竪爲使供諸寺并人給料

あやめのかつら　五月五日の節ふ群臣冠へ菖蒲を挿て出仕まそるあり太政官式元五月五日天皇觀騎射并走馬云云是日内外群臣皆着菖蒲鬘諸司各供其職續紀十七天平十九年五月庚辰太上天皇詔曰昔者五日之節常用菖蒲爲縵比来已停此事從今而後非菖蒲縵者勿入宮中方十ともそ

あやめのくき　あやめぐきふ同し拾遺夏あしびきの山郭公けふそなくあやめの草のねふかくそなく

あやめのくらうど　五月五日王卿ふ菖蒲を取り傳ふる女藏人をいふ枕五五月のせちのあやめの藏人さそ

あやめのこと　五月五日の料ふ六衛府より菖蒲を稟ふ盛て三日ふ禁中へ奉るあり近衛式元五月五日ふ藥王料昌蒲艾一物稟雜花十捧盛居臺三百平旦申ふ内侍司列設南殿前准諸府此榮かやく藤壺五月五日ふあり菖蒲ふ五色の糸を貫て之を懸る事あり

あやめのまくら　菖蒲ふそ調りたる枕そのふ東三自將軍家被進菖蒲枕

あやめのさつく糸　五月五日ふ典藥寮より菖蒲を盛て奉る寮家充之黒木案四脚二脚供御二脚給並寮儲之公家をのふ典藥式元五月五日進菖蒲生蒋公事根源典藥寮

あやめもあらぬ　あやめぐさあやめもわかぬ戀もするかな　物の差別あるをのふワケガシレヌヤウスガシレスあり古今意わくらばを鳴やさつきのあやめぐさ

あやめをある　綟目を織るあり朝忠集あやめりうなゐきるころぬやころのようふあるもののあやめをかくがあやるころぬやころのころ〳〵でをころ〳〵きそ飛龍あそ綴たる笠あり西公談抄所ふあるあやめ

あゆびを着ゐたるもあり 今昔五我ハ紺の襖ゐ欵冬の衣を着て夏毛の行騰を褰、綾の闇笠を着て

あゆ ○あい 魚名、春の初河海の間ゐ生ゝ河水ゐ游ぐ、鱗細ゆ〜七雌ハ首小ゐ身潤く色黄を帯ぶ

雄ハ身狭く淡黒を帯ぶ秋の末、淡醎の間ゐ歸り子を産て死ぬ、故ゐ年魚の名あり ○溪盤記中以飯粒爲餌釣其河之年魚 天智紀美曳之

野能曳之 野能阿喩阿喩擧曽播 和名鮎 物名抄由

あゆかせ サシスセ 物を揺ぶるをいふなり 拾遺物名そゝ〜たゞのきゝゐゐぬせもゝとかまへたるおゝあゆかせ

鼠とるぐ 赤染衛門集そゝぐ〜 ありあゆかせさでこそ 綾小路俊量卿記五節間郢曲事云云ひんたゝらを

あゆかせこそ、あゆうせばこそ、つのたゝら、やれこそ、とうとう

あゆぐ カキクケ うごくをいふなり ○揺

あゆかする セスルスレ 他をしてウゴカセルをいふなり

あゆがしむる メムムルムレ 同上

あゆがる ルルルレルレ 我がおのづからいふなり

家長日記かゝる御代ゐうまれあひ侍うとあゆぐあゝごとゐつぶ〜ことあゝ〜事をよろこびそまうし出ぬ

あゆこくむ 年魚を細ゆそゝひとるなり 永久四年盲かゞせ火のおうごげをうまびまをせうをいふ

あゆこ 魚名、もろをの類、身狭く鱗細く、口眼大なるも色

あゆあゆ ○あいあゆ ○あふらこ ○あゆこ 黄褐ゆゝて黒斑文あり

あゆのいを
あゆのかせ
あゆのつりさをぶ 称 こざうへるさを
あゆのさを 俗
あゆひ
益興兵圍大臣宅大臣出立於庭索脚帶
あゆふ ハヒフヘ
この川の瀬ゐ又走ことごとくりもそむ〳〵ところのおさえたちいるがばおくまもたる
あゆばきる セシスズ
あゆばる ルルルル
他をしそアユマセルを
いふなり
歩行の轉
なり
魚名年魚の下ゐ注ゐ大和かも川の瀬ゐふをあゆのいを取てねそこそまりせ夢ゐこそつや
東よりふく風をいふ古の越後の方言なり 万十七 東風越後俗東風謂之安由乃可是りのたく〳〵ふらしもぞの
さをしかあゆの
下ゐ注ゐ
あゆひの義なり 記中 美夜比登能阿由比比能古須受波知爾岐登 雄略紀 天皇復
ハバキヲハク をいふなり 万七 あゆだ弥ゆく〳〵あゆきのをだをもとめんと足結出めもぬ
あゆばる セシスズ
他をしそアユマセルを
いふなり

あゆばしる メルルルル 我がおのづ〳〵 アユマセルを いふなり
あゆまし 散木 下 うしろぞふあゆまゐせそたふまをあど 今昔 二 杖ゐかくりそ羸歩ぶ
あゆまひ
うど大臣とのそんゐたくひ給へり
あゆみ
ゆうん 新六二 たどり行道のあゆみさをだをそよひのいるづま
あゆみいた
橋のあゆみ板君しをむろばわれもをむろん
あゆみいづる デヅルル
あゆみ 万六 馬の歩みしてとぢめよをそこの江の岸のそゐふよゆりひそあゆみのつゆぞろり
こそろかしこゐ渡しそ往来ゐ設る板なり 太神宮式 歩板一枚 夫廿二 こちのくのをぐらの
あゆみそいづる 俗 あゆみそいづるをいふなり 枕七 竹のやをのもとゐあゆみのでく 今昔四 今死ぬること

思て叛を退たるを夫捕へて縢のうへ〻曳き卧せて
高倉院嚴島行幸記 辨の内侍御そう〳〵ろうて歩を出
あゆみいる ヲリルレ
宇後撰 うちあゆみいるうろ〳〵事もあり〳〵
紫式部日記下 あゆみいるさゝやとのゝ思へど
あゆみおそる セシスルスルル あゆみ
源幻 中將の君ひんぐ〳〵おもてふうたゝ〳〵禄〳〵たるを
あゆみかくる ヲリルレ
今昔廿三 さるわりかくる又ゆだくるの意あり
相撲共ハ打群て昨日の様ゐ歩を懸りさり
けまべ昨日勝まそ制せ〳〵所衆例の事うまべ中ゐさゞまそ
大路中ゐを過さ〳〵ことあるもひさるゆ〳〵きげあり
あゆみかへる ヲリルレ
落窪三 かへるゐもこの所へうくるあり 人さと
ぐ〳〵つかたゐ〳〵べ〳〵ありねちぐへべ
こひ〳〵くあゆみうへるこゝちも
たゞあるもひゐるべ〳〵
あゆみきたる ヲリルレ
今昔廿三 歩そて来るをりふあり 著二 そぐめ
あゆみを来たりつるものゝ邪氣あり

あゆみくる コキクルクル
堤中納言 花さかりの少將 月と花とをとり忘ぎそ花のうた人あゆみくるゐ
あゆみつゞく カキクケケ
だんだあゆみつゞきそ左右列ひをあゆみつゞきそり
あゆみのく カキクケケ
あゆみそこぶ ハヒフヘヘ
運ふりとりへどる其道堪ぐた〳〵
あゆみとゆく カキクケケ
行て岸ゐ至て凍をうぐもて陸ゐ上ぬ
あゆみとよる ヲリルレ
落窪三 あゆみとよるゆ寄るあり
よるゐ寄るあり
今昔五 鹿大王の御輿の前ゐ歩を寄るゆくところのうぐきをとりたるとのゝ
靖四 御前をあゆみそりて西ざゆふあををるを

あゆむ マミムメ

あゆまする セスルスレ
他をして[アルカセル]をいふ
歩行をいふ

あゆまーむる メムムルレ
同上

あゆまる レルルルレ
我があゆづ〻〻[アルカル]をいふ
歩行くをいふ

あゆめる ラリルレ
万七 とり〻〻ありとらるるお見ゆる妹が家おもほゆ〻〻いでて来し
源幻 あゆ〻〻しきを見給へば平家九其中に武者二騎おしてあゆませ出さう

あゆもどき 俗
豆腐ゆえ作るものをいふ[豆腐百珍]あゆもどき豆腐と長〻ちーらふきりゆさく
油漬と蓼酢をかけるをいふ

あゆる エユルユレ
足のそこびをいふ
あり〻ふ同〻〻〇歩行

あえさする セスルスレ
他をして[アヤカラセル]をいふ

あえーむる メムムルレ
同上

あえらる レルルルレ
我があめづ〻〻物ゆ[アヤカラル]を云ふ

[應神紀]肖、阿處[云]順集君いもあゆるよの政字肖[アユ]
血あゆる汗あゆるなどと流出るをいふ

あゆる エユルユレ

あえさする セスルスレ
他をして血や汗を[ナガサセル]を云ふ

あえーむる メムムルレ
同上

[記上]悉常血爛也[宇拾二]その男がもりそのを血あゆでうかるる〻〻たる跡給へ[枕二]

あゆる エユルユレ
木の實の熟するを云ふ[万十]ゆきつけがさくさの花の阿要奴蟹あゆへど

あゝまたぶれあそざれべ 又十六 安由流實いれゐふ
ぬきろ〳〵手よまろまて見もてどもまうぞ

あよぐ ガ ギ グ ゲ
あゝぐふあゝ〳〵
〇搖

あよげる ラ リ ル レ
搖てあるゝと
ゐふゐふ

崇峻紀 衛士等被詐指搖 馳言萬在此 出雲風土記 爾時
男之父母館原中隱而居之時館葉動

あよびうくる ラ リ ル レ
ゐまふ賀顔をかゝくそあゝ〳〵
ふ〳〵よろふ鬼のあよびうくる 宇拾九 鬼さゝがさゝふ〳〵とのふ
とのひて

あゝむの轉ゐう 〇歩行 宇拾九 あゝふ
あよびうくぬ 轉寐記 ゐまふ 註の人

あよぶ バ ビ ブ ベ
あゝんとたゞあよびふ
あよびようて

語彙巻四